

西平内 I 遺跡発掘調査報告書

環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査

2020. 3

岩手県洋野町教育委員会

西平内 I 遺跡発掘調査報告書

環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査

序

洋野町は岩手県の最北端に位置し、北は青森県三戸郡階上町、西は軽米町、南は久慈市、東は太平洋に接し、海と高原に囲まれた自然豊かな町です。平成18年1月1日、旧種市町と旧大野村が合併して洋野町が誕生しました。

西平内I遺跡は、平成26年度・27年度の公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査により、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などのほか、多数の集石、弧状の石列が発見されました。その後、平成28年度に洋野町教育委員会が実施したハンドボーリング調査により、弧状の石列は環状列石と想定されることが明らかとなり、平成30年6月1日、町史跡に指定されました。

本報告書は、西平内I遺跡のトレンチ発掘調査の報告をまとめたものです。この調査の結果が環状列石の研究において、いささかでもお役に立てれば幸いです。また、本書が関係者はもちろん、広く町民の方々に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護に多少なりとも寄与されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、多大なご助言ご協力をいただきました関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

令和2年3月

洋野町教育委員会

教育長 林 剛敏

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡洋野町第37地割地内に所在する、西平内I遺跡のトレンチ発掘調査結果を収録したもので、岩手県立博物館と洋野町教育委員会が合同で実施したものである。
2. 本遺跡の調査は、国庫補助金を導入して実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号はIF48-0041である。
4. 調査主体者 岩手県立博物館、洋野町教育委員会
担当者 岩手県立博物館：濱田宏、金子昭彦
洋野町教育委員会：千田政博
5. 調査指導 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
6. 試料の分析・鑑定及び委託業務は下記の方々・団体に依頼した。(敬称略)
自然科学分析：バリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社加速器分析研究所
石材鑑定：花崗岩研究会 柳澤忠昭
石器実測：株式会社ラング
7. 第Ⅲ章を除き本報告書の執筆・編集・構成は千田政博が担当した。
8. 第Ⅱ章洋野町内の遺跡については、平成31年(2019年)4月時点での「岩手県遺跡台帳」に基づくものである。
9. 野外調査、資料収集及び本報告書の作成等に際して下記の方々からご指導、ご助言、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(五十音順、敬称略)
相原淳一、赤坂朋美、伊藤陽肇、稲村晃嗣、株式会社岩手測器社、株式会社ダイヤ、熊谷常正、小林克、須川翼、成田滋彦、古屋敷則雄
10. トレンチ発掘調査作業においては、次の方々にご協力いただいた。(五十音順、敬称略)
岩谷タミ、川戸ちせ、玉澤ハナエ、塚野忠男、長根山一、野口小枝子、信田義明、庭瀬チサ子
11. 空中写真撮影、室内整理、報告書作成にあたって、次の方々にご協力いただいた。(五十音順、敬称略)
田毛英明、村田千鶴、横山香
12. 土層の観察は「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。
13. 調査で得られた諸記録等については、洋野町教育委員会で保管、管理している。
14. 引用・参考文献については文末に取めた。

目 次

序	
例 言	
目 次	
凡 例	

本 文

I. 遺跡の概要	4
II. 洋野町内の遺跡	4
III. 西平内1遺跡の自然科学分析	17
1. 堆積物及び炭化材・岩石の分析	17
2. 西平内1遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	27
IV. トレンチ発掘調査の概要と成果	33
1. 調査の概要	33
2. 各トレンチの調査結果	33
3. 調査の成果とまとめ	49

報告書抄録

表

第1表 町内の遺跡一覧(1)	11	第6表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補 正值、暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代)	29
第1表 町内の遺跡一覧(2)	12	第7表 土器観察表(1)	37
第1表 町内の遺跡一覧(3)	13	第8表 土器観察表(2)	39
第1表 町内の遺跡一覧(4)	14	第9表 石器観察表(1)	40
第1表 町内の遺跡一覧(5)	15	第10表 土器観察表(3)	43
第2表 樹種同定結果	18	第11表 石器観察表(2)	43
第3表 岩石肉眼鑑定結果	19	第12表 土器観察表(4)	46
第4表 構成物量比	19		
第5表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	29		

図 版

第1図 遺跡位置図	1	第4図 町内遺跡位置図	10
第2図 遺跡範囲図	2	第5図 柱状試料採取位置	21
第3図 環状列石の位置と周辺の地形図	3	第6図 暦年校正年代グラフ(参考)	30

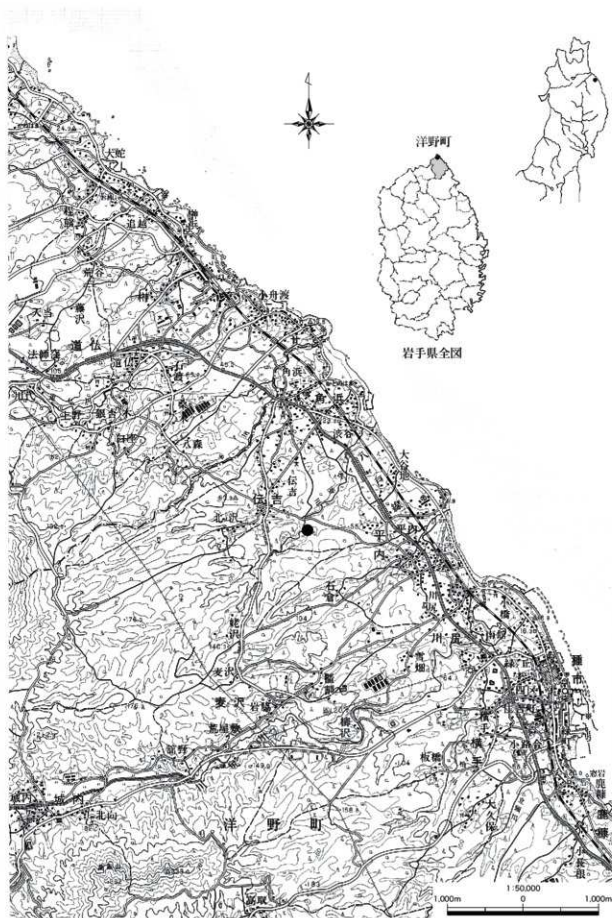
第7図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財 センター発掘調査遺構配置図とハンド ボーリング調査成果図の合成	31	第16図 Cトレンチ出土遺物 土器	42
第8図 トレンチ配置図	32	第17図 Cトレンチ出土遺物 石器	43
第9図 土層概念図	33	第18図 Dトレンチ	44
第10図 Aトレンチ	36	第19図 Eトレンチ	45
第11図 Aトレンチ出土遺物 土器	37	第20図 D・Eトレンチ出土遺物 土器	46
第12図 Bトレンチ	38	第21図 トレンチ内の礫平面図	47
第13図 Bトレンチ出土遺物 土器・土製品	39	第22図 第21図の拡大	48
第14図 Bトレンチ出土遺物 石器	40	第23図 トレンチ内礫の石質	50
第15図 Cトレンチ	41	第24図 環状列石の比較	51
		第25図 環状列石の拡大図①	53
		第26図 環状列石の拡大図②	55

写真図版

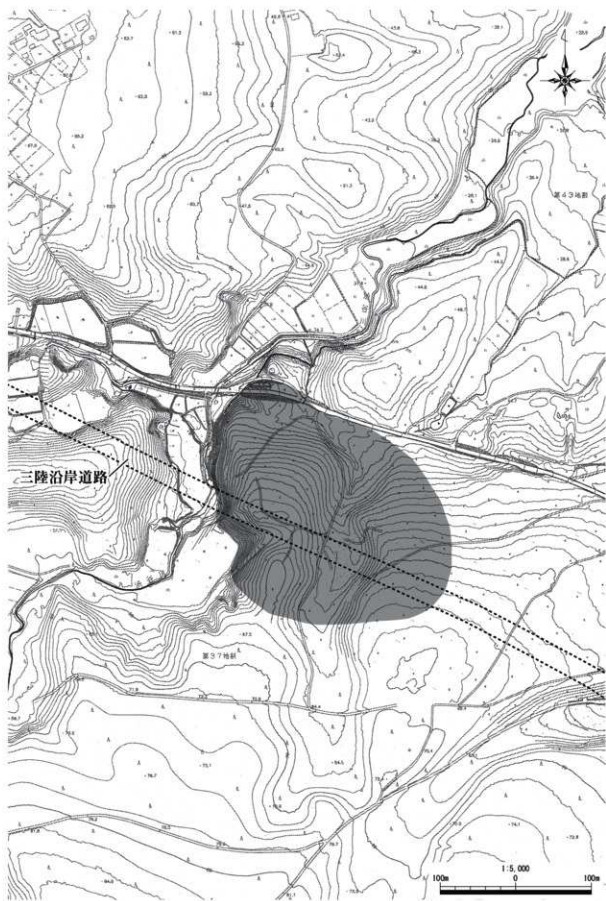
写真図版1 柱状試料写真および軟X線写真	24	写真図版8 Bトレンチ	61
写真図版2 炭化材	25	写真図版9 Cトレンチ	62
写真図版3 薄片	26	写真図版10 D・Eトレンチ	63
写真図版4 遺跡遠景・近景	57	写真図版11 遺物出土状況	64
写真図版5 調査前近景	58	写真図版12 A・Bトレンチ出土遺物	65
写真図版6 調査後近景	59	写真図版13 B・Cトレンチ出土遺物	66
写真図版7 Aトレンチ	60	写真図版14 C～Eトレンチ出土遺物	67

凡例

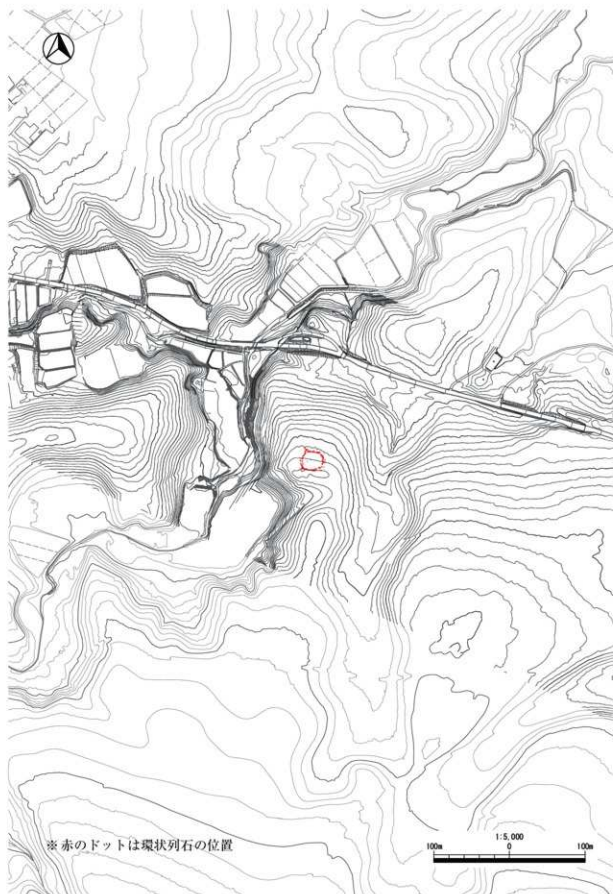
1. 第1図は国土地理院発行の50,000分の1の地形図、第4図は50,000分の1の洋野町管内図を複写して使用した。
2. 第2図・3図・5図・7図・8図・21図・22図・25図・26図は、国土交通省が作成した地形図を提供していただいた。
3. 第3図・5図・7図・8図・10図・12図・15図・18図・19図・21～24図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
4. 第5図・7図・8図・21図・22図・25図・26図は、「西平内1遺跡ハンドボーリング調査報告書」(2019 洋野町埋蔵文化財調査報告書第4集)の、第8図「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査遺構配置図とハンドボーリング調査成果図の合成」を用いた。
5. 写真図版のうち、遺跡遠景の空中写真は、岩手県土整備部河川課より提供いただいた。
6. 遺物図版の縮尺は、土器拓影図1/3、土製品拓影図2/3、礫石器実測図1/3とした。
7. 遺物写真の縮尺についても、土器1/3、土製品2/3、礫石器1/3とした。掲載順は遺物図版と同様である。
8. 遺物観察表中の法量について、残存値は()、推定値は〈 〉で表示した。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡範囲図



第3図 環状列石の位置と周辺の地形図

I. 遺跡の概要

西平内Ⅰ遺跡は太平洋岸から西へ19km、青森県境から南東へ1.3kmの北向き丘陵上に位置する。遺跡の西側から北側に向かい洪谷川が流れる。標高は61.4m～63.2mである。平成16年度(2004)に、旧種市町教育委員会による町内遺跡詳細分布調査により発見された遺跡である。縄文時代後期の土器や打製石斧、剥片が採集されている。遺跡から東に300mのところに平内Ⅱ遺跡が所在し、本遺跡と同時期の土器が出土している。また、北西200mには伝吉Ⅰ遺跡、西へ300mのところに北ノ沢Ⅰ遺跡が所在する。

本遺跡は、一般国道45号線三陸沿岸道路事業(洋野～階上)に伴い、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(以下岩手県埋蔵文化財センターに略称する)により、平成26年度(2014)及び平成27年度(2015)に発掘調査が実施された遺跡である。

発掘調査の結果、集石群が62基、弧状の石列が1基、整地層2枚の他、堅穴住居跡5棟、堅穴状遺構1棟、掘立柱建物跡5棟、陥し穴状遺構16基、土坑37基、焼土遺構14基、炉跡10基、埋設土器4基、柱穴10個が検出された。遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品が出土している。縄文土器は後期初頭～前葉のものが主体を占めている。

その後、平成28年度(2016)に洋野町教育委員会によるハンドボーリング調査が行われ、弧状の石列が環状列石と想定されることが明らかとなった。同遺跡は平成30年度(2018)に町史跡に指定された。

II. 洋野町内の遺跡

洋野町内に所在する遺跡は、平成31年(2019)4月現在、岩手県遺跡台帳に219遺跡が登録されている。平成23年(2011)以降、三陸沿岸道路建設や再生可能エネルギー事業等に係る試掘調査により新規発見の遺跡が増加している。

町内遺跡詳細分布調査は、旧種市町が行った平成16年度(2004)の角の浜・伝吉・平内・変沢(鮎沢)地区の分布調査のみである。旧大野村分についても実施しておらず、町内には未発見の遺跡が多く所在するものと想定される。町内の発掘調査は岩手大学草間俊一教授により昭和30年(1955)から昭和36年(1961)にかけて遺跡の踏査と発掘調査が行われたのが最初であるが、その後平成25年度(2013)までの調査事例は数件にとどまっていた。平成26年度(2014)以降、三陸沿岸道路建設等に伴う本発掘調査により調査事例が急激に増加したものの、町内に所在する遺跡の様相については不明な部分が多い。

旧石器時代の遺跡の登録はないが、「角川日本地名大辞典3」によると、旧石器遺物出土遺跡として鉄山遺跡(大谷鉄山か?)、有家遺跡(上のマッカ遺跡か?)が紹介されている。和座川上流の海岸段丘上に立地する鉄山遺跡から石刃・剥片・敲石が出土、海岸段丘上に立地する有家遺跡から石斧・剥片が出土し、いずれも高館火山層最上部から発見されたとある。しかし、遺跡の名称は現在登録されているものに該当せず、詳細は不明である。

縄文時代の遺跡数は、全体の7割以上を占める。草創期の遺跡は現在のところ登録はないが、洋野町境から3kmの青森県三戸郡階上町大字平内にある滝端遺跡では爪形文土器が出土している。また、階上町に隣接する八戸市南郷区黄檗遺跡、洋野町に隣接する軽米町馬場野Ⅱ遺跡でも草創期の土器が出土していることから、町内からも出土する可能性がある。

早期の遺跡として、ゴッソー遺跡(20)、大宮Ⅱ遺跡(47)、大宮Ⅰ遺跡(48)、宿戸遺跡(199)、中野城内遺

跡(203)などがある。大宮遺跡は、昭和36年(1961)に草間教授により発掘調査された遺跡で、A・B・Cの3地区に分けて調査が行われ報告されている。A・B地区からは貝殻土器が出土しており、特にB地区からは胴部に貝殻条痕、口唇部に貝殻腹縁文の尖底土器が出土している。草間教授は、岩手県で初めて復元された貝殻文の尖底土器であり、発見されたことは多大な成果であると報告している。ゴッソー遺跡では公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(以下岩手県埋蔵文化財センターに略称する)による平成6年度(1994)の発掘調査で、遺構には伴わないが日計式土器、魚骨回転文土器、寺の沢式土器等が出土している。中野城内遺跡は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、岩手県埋蔵文化財センターにより平成29年度(2017)に調査が行われた。調査の結果、早期とみられる土坑、白浜式土器が出土している。

前期の遺跡として、ゴッソー遺跡(20)、上のマッカ遺跡(43)、北ノ沢Ⅰ遺跡(163)、小田ノ沢遺跡(200)などがある。ゴッソー遺跡は早期～晩期の縄文土器が出土しているが、前期初頭の遺物量が多く、特に平成6年度(1994)の岩手県埋蔵文化財センターによる本発掘調査で出土したコンパス文土器や押型文土器は岩手県で初めての出土と考えられる。同遺跡もやはり昭和36年(1961)に草間教授により発掘調査された遺跡で、縄文時代前期の土器を中心に縄文時代早期の土器、弥生時代の土器、土師器片、石器を採集したとの報告がある。なお、上のマッカ遺跡は昭和36年(1961)草間教授の調査により、貝塚が存在する可能性が指摘されている。

中期の遺跡として、千敷平遺跡(4)、ゴッソー遺跡(20)上のマッカ遺跡(43)、北ノ沢Ⅰ遺跡(163)などがある。平成27年度(2015)洋野町教育委員会によるゴッソー遺跡の本発掘調査では、中期初頭の竪穴住居跡が1軒発見され、三重の入れ子にした土器埋設炉と単体の土器埋設炉が並列した状態で検出された。その入れ子の土器埋設炉の中からヒエの胚孔が検出された。

後期の遺跡として、平内Ⅱ遺跡(65)、上水沢Ⅱ遺跡(92)、西平内Ⅰ遺跡(185)、南川尻遺跡(194)、サンニヤⅠ遺跡(195)、北鹿糠遺跡(196)、下向遺跡(202)、サンニヤⅢ遺跡(218)などがある。町内の縄文時代の遺跡で、後期前業に位置付けられる遺跡が一番多く、その中でも溝状土坑(陥し穴状遺構)と遺構外から後期前業の土器が出土する遺跡が多数を占める。平内Ⅱ遺跡は洋野町教育委員会により、平成11年度(1999)から平成25年度(2013)の間、延べ6箇年発掘調査が行われた。屋外炉、集石、焼土遺構、溝状土坑が検出されており、出土した土器は主に後期前業に位置付けられるものである。上水沢Ⅱ遺跡は平成12年度(2000)に岩手県埋蔵文化財センターにより本発掘調査が行われ、後期前業から後業の竪穴住居跡が11軒発見された。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴い発掘調査が行われた遺跡で、後期に属する竪穴住居跡が検出された遺跡は、西平内Ⅰ遺跡(185)、南川尻遺跡(194)、サンニヤⅠ遺跡(195)、北鹿糠遺跡(196)、南鹿糠Ⅰ遺跡(206)があり、南川尻遺跡は後業、それ以外は前業のものである。

晩期の遺跡として、たけの子遺跡(21)、大平遺跡(32)、ニサクドウ遺跡(58)、戸類家遺跡(61)、田ノ沢遺跡(63)などがある。特にたけの子遺跡は町内で晩期を代表する遺跡である。昭和36年度の岩手県遺跡台帳作成調査において、戦争中開墾の際多数の土器が出土し、現在は植林されており包含層は良好で重要な遺跡であるとの報告がある。洋野町立種市歴史民俗資料館収蔵の考古資料の多くはこの遺跡からの出土である。戸類家遺跡は昭和32年(1957)に慶応義塾大学江坂輝彌氏により発掘調査が行われており、土器、石器の他に土偶が出土している。この時の土偶は現在慶応義塾大学考古学研究室に収蔵されている。また、昭和7年(1932)には岩手県史跡名勝天然記念物調査委員会であった小田島祿郎氏が同町を訪れており、その時に採集された田ノ沢遺跡、八木貝塚の出土遺物が岩手県立博物館に収蔵されている。

なお、貝塚遺跡としてホッキリ貝塚(33)、八木貝塚(37)、小子内貝塚(40)、黒マッカ貝塚(41)がある。ホッキリ貝塚からは岩手県で初めて縄文時代の製塩土器が出土しており、久慈市の大芦Ⅰ遺跡で平成9年(1997)に

発見されるまで、製塩土器が発見された県内唯一の遺跡であった。海岸付近に位置する同貝塚は、昭和24年(1949)に行われた造船所の建設工事によりほぼ壊滅したとみられるが、製塩遺跡であった可能性がある。洋野町の故玉沢重作氏により製塩土器が発見され、その後岡山大学名誉教授近藤義郎氏が、芹沢長介氏、伊東信雄氏、江坂輝彌氏から情報を得て昭和35年(1960)同遺跡を調査し、土器の検討を行っている。このほか縄文時代の製塩土器は、ゴッソー遺跡の平成12年度(2000)岩手県埋蔵文化財センターによる本発掘調査でコンテナ1箱分出土している。洋野町立種市歴史民俗資料館には、たけの子遺跡で採集された縄文時代の製塩土器片が多数収蔵されている。また、平成16年度(2004)の種市町内遺跡詳細分布調査において、南平内I遺跡(182)より製塩土器片が晩期の縄文土器とともに発見された。同遺跡は現在の汀線まで約150mの距離であるが、時代によっては汀線付近であった可能性もある。遺跡の残存状況も良くないため詳細は不明であるが、位置から推測すると製塩を行った遺跡であることも考えられる。

弥生時代の遺跡として、大平遺跡(32)、大宮II遺跡(47)、大宮I遺跡(48)、平内II遺跡(65)、上水沢II遺跡(92)などがある。先述した平内II遺跡では、平成25年度の調査で弥生時代前期後葉の堅穴住居跡が2軒検出されている。上水沢II遺跡では弥生時代後期の堅穴住居跡が1軒検出され、土器がコンテナ約1箱分出土している。なお、西平内I遺跡では、沈線間に交互刺突文を有する弥生時代後期の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡については集落遺跡の確認はないが、袖山遺跡(38)において、剣形の石製模造品が表面採集されている。同品もまた故玉沢重作氏により発見されたもので、長さ4.2cm、最大幅1.5cm、厚さは最大で4mm、重さは3.6g、石材は北上山地が産出地の蛇紋岩で、色調は暗緑灰色である。茎の表現が簡略化された二等辺三角形に三角形を付加した形状で、全体が丁寧に研磨されて、頭部には垂下孔とみられる径2mmの穿孔があり、表面は筋が表現されている。形状から5世紀後葉より古い可能性がある。袖山遺跡は標高約50mの海岸段丘上に立地し、現状は山林などで、主な時代は縄文時代であるが、石製模造品の他には当該期の遺物は発見されていない。昭和28年(1953)に東北大学伊東信雄教授が東北地方の石製模造品の集成を行い発表した「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」により同品が紹介され知られるようになった。この石製模造品も岩手県で初めて発見されたもので、昭和58年(1983)に戸町馬場平遺跡から剣形の石製模造品が発見されるまで県内唯一のものであった。

奈良・平安時代の遺跡として、城内遺跡(11)、ニサクドウ遺跡(58)、八森遺跡(73)、サンニヤII遺跡(205)、南鹿糠I遺跡(206)などがある。サンニヤII遺跡では、三陸沿岸道路事業に伴い平成26年度(2014)・27年度(2015)の岩手県教育委員会による発掘調査で、8世紀後半から9世紀前半の時期の堅穴住居跡が3軒検出されている。また、国道45号線種市登坂車線整備事業に伴い、岩手県埋蔵文化財センターにより平成28年度(2016)に調査が行われた、八森遺跡でも8世紀代の堅穴住居跡が1軒検出されている。城内遺跡からは8世紀代と考えられる土師器の長胴壺、球胴壺、甎、土師器坏が出土している。なお、草間教授の報告書によるとニサクドウ遺跡で土製支脚、土師器坏が出土している。

二十一平遺跡(69)では古代(平安時代)の製塩土器が出土している。同遺跡は岩手県と青森県境を流れる二十一川の南側の汀線付近に位置する。海岸整地に伴う重機の掘削により遺跡の存在が明らかになり、平成15年度(2003)に新規登録された。製塩土器片、土製支脚片が多量に散布し、被熱したような円礫もみられた。現在までにコンテナで約5箱分が採集されている。遺跡の立地、発見された遺物の状況から製塩を行った可能性が高いが、保存状況は重機の掘削により一部破壊されていると考えられる。また、未登録の遺跡ではあるが、胸木野智寛氏、相原淳一氏による古津波堆積層の調査に伴い海岸付近で採集されている製塩土器もある。なお、古代の製塩土器は海岸から6.2kmの館野遺跡(207)でも採集されており、町内には縄文時代や古代の製塩土器、土

製支脚を伴う遺跡が多く所在することが予想され、製塩遺跡の発見や製塩土器の資料の増加が見込まれる。

中世の遺跡として中世城館跡の分布調査が昭和59年(1984)に岩手県教育委員会により行われており、岩手県遺跡台帳には28遺跡が登録されているが、ほとんどが城主などの詳細が不明である。

種市の城内地区には種市氏の居城である種市城跡が所在する。種市氏は中世～近世初期に当地方を領有していた三戸南部氏(後の盛岡南部氏)の家臣である。「南部藩参考諸家系図」(以後系図)によれば、種市中務(実名不詳)が三戸南部氏24代晴政から種市村、蛇口村(軽米町)ならびに傍村賜り種市村に居住したとある。およそ16世紀半ば頃と推測されるが、それ以前のことは不明である。「奥南旧指録」には、三戸南部氏25代晴継の股臣の臣として中務が久慈備前と名を連ねており、三戸南部氏の有力家臣であったとみられる。系図によると、種市中務の長男光徳は同じく中務と称した。光徳は三戸南部氏26代信直(初代盛岡藩主)から種市村ならびに傍村に600石を賜ったとある。「聞老遺事」によると、天正19年(1951)九戸政実の乱の際、信直方に属し18人の部下と鉄砲三挺、弓三張で参陣している。また、2代盛岡藩主利直の時に起きた慶長5年(1600)の岩崎合戦では、部下18人と参陣している。なお、系図には光徳の妻は根城南部氏(後の遠野南部氏)18代八戸政栄の弟新田政盛の娘であることが記されている。

その後光徳の長男孫三郎が家督を継いだ。「聞老遺事」によれば大坂夏の陣に出陣している。光徳と孫三郎父子は、初代盛岡藩主信直、2代盛岡藩主利直父子に仕え活躍した家臣であったが、孫三郎は3代盛岡藩主重直の時、罪ありということで禄を没収され、慶安2年(1649)に没している。

光徳の次男吉広は系図によれば、天正15年(1587)に初代盛岡藩主信直から閉伊口村(久慈市)を賜り住んでいたが、天正17年(1589)に蛇口村に替地を賜り、蛇口氏に姓を変えている。

岩手県遺跡台帳には、平時居住していた平城の種市城跡(16)と非常時に立てこもったとされる山城の種市城跡(17)が登録されている。平城の種市城跡はJR八戸線種市駅より西へ約9kmに所在し、平城跡は現在でも馬場屋敷、的場、神楽屋敷など当時の名残と思われる地名が存在する。そこから南西へ約1kmに山城の種市城跡が位置する。

天正18年(1590)、豊臣秀吉の朱印状により初代盛岡藩主信直が「南部内七郡」を安堵されると、八戸・九戸地方一帯は信直が直接支配することとなり、寛永4年(1627)に根城南部氏が伊達氏に対する備えを理由に遠野へ転封されると盛岡藩の直轄地になった。八戸には八戸城代が配置され、さらに八戸地方には八戸代官、九戸郡には久慈代官を派遣し支配にあたったようである。

寛文4年(1664)9月、3代盛岡藩主重直が跡継ぎを決めないままに死去した。同年11月、幕府は重直の次男の重信と末弟の直房を呼び、盛岡藩10万石のうち8万石を重信に相続させ、残り2万石を直房に与え、新規に一藩をおこさせる処置を取った。寛文5年(1665)2月、盛岡藩より領地の配分が行われ、八戸を居城とし、三戸郡41箇村、九戸郡38箇村、志和郡4箇村、都合83箇村が付与された。八戸藩は、各村の支配のため通制という行政区域を用い、三戸郡には八戸廻・名久井通・長苗代通、九戸郡には軽米通・久慈通、志和郡には志和の行政区を設定し、各通には代官所を配置した。種市は八戸廻、大野は久慈通に属していた。

八戸藩の主な産業は、商業、林業、漁業、製塩業、鉄産業、造船業などがあり、特に製鉄業は原料である砂鉄と燃料の薪炭材が豊富であったため盛んに行われた。製鉄に関する史料は八戸藩の藩庁の日記である目付所日記、勘定所日記、民間の史料では晴山家文書、淵沢家文書、西町屋(石橋)文書などがあり、様相を知ることができる。

製鉄の中心地は大野で、鉄山会所として日弘所がおかれ、鉄山支配人が詰めて生産方を指揮した。天保9年(1838)には、大野の鉄山として玉川山、金取山、葛柄山、水沢山、大谷山、川井山、滝山の七山があった。晴山家文書

の天保8年(1837)「寛政年中より拾書」は鉄山支配人の経緯が記されているが、晴山文史郎から安永7年(1778)に初代晴山吉三郎へ受け継がれ、その後数人の支配人を経て、享和2年(1802)からは飛騨の浜谷(屋)茂八郎が引き継いだ。そして、文政6年(1823)には、鉄山は藩営となり、石橋徳右衛門が支配人に就任して、その下支配人に二代目晴山吉三郎が就いた。さらに天保5年(1834)の百姓一揆後は、軽米の淵沢右衛門が支配人を命じられ、天保9年(1838)からは江戸の美濃屋宗(惣)三郎(家臣名金子丈右衛門)へと移った経過が記されている。

近世の遺跡として町指定史跡の有家台場(46)がある。目付所日記によると、八戸藩では幕府から異国船警戒の命を受けて、寛政3年(1791)に鉄砲堅・目付御用掛を任命し、異国船の警戒に当たらせてきたようである。寛政5年(1793)の中里覚右衛門書き上げの「堅場」には「大堅」として鮫村、変生、「小堅」として八太郎浦、湊浦、小船渡浦、有家浦、中野浦の名があげられている。藩の日記などには異国船の出没記録がいくつかあるが、目付所日記によると文政8年(1825)有家浦の沖合15里に異国船一隻が近寄り、伝馬船二隻を出して上陸の様子をみせたので、弓・鉄砲衆など計34人の藩士が同日に派遣されたことが記されている。その後、安政元年(1854)八太郎・湊場尻・館鼻・塩越・鮫・小船渡・有家・久慈湊に台場が築かれ、有家にも陣屋堅の役人が任命された。有家台場跡の現況は、八戸線の建設工事などで破壊されているものの、保存状況は概ね良好で、盛土遺構の一部が残存している。

当町の特徴を示す製鉄関連の遺跡は、21箇所(旧種市町16箇所、旧大野村5箇所)登録されている。先述した七山の一つである大谷鉄山(26)は大谷地区にあり、鉄山操業により形成された集落とみられ、製鉄に関わった人々の子孫が多く居住している。製鉄関連の遺跡調査については、岩手県教育委員会の製鉄関連遺跡の詳細分布調査において、旧種市町5箇所、旧大野村35箇所の遺跡の所在を確認している。また、元野田村教育長、田村栄一郎氏によるたたら遺跡の踏査によると、旧種市町は鉄山跡12箇所の他、密鉄場跡や鍛冶場跡など15箇所、旧大野村は42箇所と鍛冶場跡の調査結果報告(1987『みちのくの砂鉄いまいずこ』)がある。鉄滓が採集される遺跡が少なくとも60箇所以上にのぼり、未発見のものも含めると相当数になると考えられる。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴う発掘調査において、南八木遺跡(201)で古代～中世の製鉄関連の遺跡が発見された。少なからず近世以前のものも所在することが予想されるが、町内の製鉄関連遺跡を踏査された佐々木清文氏によると、ほとんどが近世のもので、それ以前のもは所在しても少数であろうとのご教示をいただいている。今後製鉄関連の詳細な町内全域の分布調査を行い、製鉄関連遺跡分布図の作成、遺跡の登録作業が必要である。

製鉄以外の金・銀・銅・鉛鉱山のいわゆる非鉄鉱業については、八戸藩の日記類に僅かにみられるが、盛岡藩領に比べ八戸藩領内には大きな金山はなく、小規模な金山がいくつかあるのみのようである。梅内家文書の慶安2年(1649)の「砂金採取運上金請取状」によると、沢尻、雪畑、小手沢、野そうけ山に金山があったことが記されている。岩手県遺跡台帳には金山跡として、小手野沢金山(14)、ノソウケ金山(23)の2遺跡が登録されている。

<引用・参考文献>

草間俊一 1963『種市の歴史(原始・中世)種市町語遺跡の調査報告』種市町役場

角川書店 1985『角川 日本地名大辞典3岩手県』

田村栄一郎 1987『みちのくの砂鉄いまいずこ』

伊東信雄 1953「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」『歴史第6輯』東北史学会

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1996「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2001「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集

岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2002「上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集

(公財)岩手県文化振興事業団 2015「平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡 沼袋Ⅲ遺跡

八幡沖遺跡 ほか調査概報(39遺跡)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

(公財)岩手県文化振興事業団 2016「平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢Ⅳ遺跡 白石遺跡

ほか調査概報(33遺跡)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団

2017「西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集

(公財)岩手県文化振興事業団 2017「平成28年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ遺跡・橋洞Ⅳ遺跡・八森遺跡

ほか調査概報(28遺跡)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団

2018「北鹿糠遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団

2018「サンニヤⅠ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第687集

(公財)岩手県文化振興事業団 2018「平成29年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ・H遺跡 和野新神社遺跡 北野Ⅱ遺跡

木戸場遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 根井沢穴田Ⅳ遺跡 耳取Ⅰ遺跡 千賀城遺跡 ほか調査概報(23遺跡)」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集

岩手県教育委員会 1986「岩手県中世城館分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第82集

岩手県教育委員会 1998「岩手の貝塚」岩手県文化財調査報告書第102集

岩手県教育委員会 2006「岩手の製鉄遺跡」岩手県文化財調査報告書第122集

岩手県教育委員会 平成28年3月「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度復興関係)」岩手県文化財調査報告書第146集

岩手県教育委員会 平成29年3月「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成27年度復興関係)」岩手県文化財調査報告書第149集

岩手県教育委員会 平成30年3月「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成28年度復興関係)」岩手県文化財調査報告書第152集

岩手県種市町教育委員会 2004「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」種市町埋蔵文化財調査報告書第1集

岩手県種市町教育委員会 2005「種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」種市町埋蔵文化財調査報告書第2集

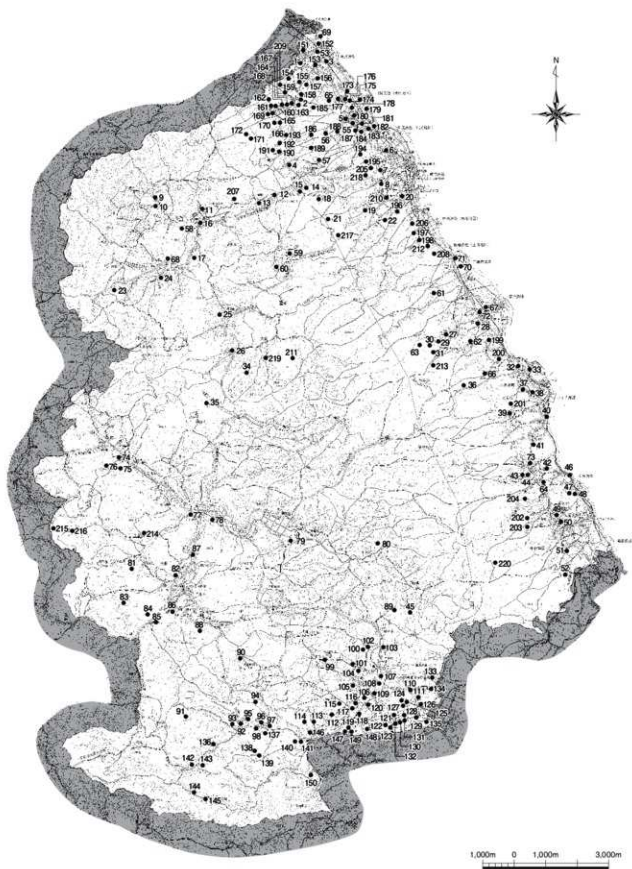
岩手県洋野町教育委員会 2013「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集

岩手県洋野町教育委員会 2015「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集

岩手県洋野町教育委員会 2017「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集

洋野町 2006「種市町史第六巻通史編(上)」種市町史編さん委員会

大野村 2006「大野村誌第二巻史料編Ⅰ」大野村誌編さん委員会



第4図 町内遺跡位置図

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺跡・遺物	備考
1	IF37-1386	角沢	かどのはま	様市第42地跡	縄文	散石地	縄文土器	昭和52年、範囲変更(平成23年度)
2	IF37-2206	伝吉丁	でんきちいち	様市第43地跡	縄文、古代	散石地	縄文土器(早期・中期)、 須石土器(須石器、 土師器等)	昭和52年、伝吉遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
3	IF38-1086	奥川日丁	おくかわのひら	様市第39地跡	縄文	散石地	縄文土器(前・中・晩期)、 石斧、石刀、須石	昭和52年、奥川遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
4	IF47-2234	千歳平	せんじきひら	様市第46地跡	縄文	集落跡	縄文土器(前・中・晩期)、 石斧、須石	
5	IF48-0170	平内丁	ひらないひら	様市第34地跡	縄文	散石地	縄文土器(前・中期)、 須石	昭和52年、平内遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
6	IF48-1276	善田	みなみで	様市第28地跡	中世	城跡跡	堀跡(城跡)	昭和59年度調査
7	IF48-2234	藤子	よこで	様市第24地跡	縄文、古代	散石地	縄文土器(晩期)、土師器	範囲変更(平成23年度)
8	IF48-2283	トナの本	とらのき	様市第21地跡	縄文	散石地	縄文土器(後・晩期)	
9	IF56-0330	美春	あさまき	様市第59地跡	縄文、弥生	集落跡	縄文土器(中期)、弥生土器	
10	IF56-0370	八幡堂前(八幡殿表前)	はちまんどうで	様市第61地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡	昭和59年度調査、八幡前より名称変更(平成13年度)
11	IF57-0086	城内	じょうない	様市第56地跡	縄文、古代	集落跡	土師器長頸甕、土師器釜	
12	IF57-0229	鬼屋敷前(殿丸前)	おにやしきで	様市第50地跡	中世	城跡跡	堀跡(城跡)	昭和59年度調査
13	IF57-0284	姫野原	ひめので	様市第50地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡、竪穴	昭和59年度調査
14	IF57-0309	小手野沢金山	こてのさわきんざん	様市第51地跡	近世	採金採取跡	石垣	小手野山金山より名称変更(平成13年度)
15	IF57-0317	土橋前	とばしで	様市第51地跡	中世	城跡跡	堀跡前、採掘跡	昭和59年度調査
16	IF57-1023	様市城(平城)	あらいちじょう	様市第60地跡	中世	城跡跡	堀跡	昭和59年度調査
17	IF57-3033	様市城(山城)	たねいちじょう	様市第60地跡	中世	城跡跡	堀跡、平場	
18	IF58-0034	小手野が原	こてのさわで	様市第51地跡	中世	城跡跡	堀跡、平場	昭和59年度調査
19	IF58-0169	飯坂前	いばしで	様市第21地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡	昭和59年度調査
20	IF58-0341	ゴッソー	ごっさー	様市第18地跡	縄文	集落跡	弥生土器(前期・中期)、 須石土器(須石器、 土師器)	昭和52年・56年、平成6年度・12年度・27年度本発掘調査
21	IF58-1006	たけの子	たけのこ	様市第21地跡	縄文	散石地	縄文土器(後・晩期)、 須石土器	
22	IF58-1205	大入保	おおほ	様市第19地跡	縄文、古代	散石地		
23	IF59-0156	ノツケ金山	のすけきんざん	様市第20地跡	近世	採金採取跡	石垣	
24	IF60-0300	小平年館(テッコウ)	こがようだて	様市第20地跡	中世	城跡跡		昭和59年度調査
25	IF67-1131	和進前	わじで	様市第71地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡、平場	昭和59年度調査
26	IF67-2146	太谷鉄山	おおやでつざん	様市第73地跡	近世	製鉄関連	鉄滓	八戸藩大野村鉄山
27	IF69-1094	西の館	にしので	様市第8地跡	縄文、中世	散石地、 城跡跡	縄文土器(後期)、石器、 土師器	
28	IF69-1157	坂戸前	さかのへで	様市第7地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡、平場	昭和59年度調査
29	IF69-2013	西の館	にしので	様市第7地跡	中世	城跡跡	土器、堀跡、平場	昭和59年度調査
30	IF69-2029	西風の田	にしのでた	様市第7地跡	縄文	散石地	縄文土器(晩期)、石器、 土師器	
31	IF69-2941	上岡谷	かみおかや	様市第7地跡	縄文	散石地	縄文土器(晩期)	
32	IF69-2980	大平	おおだいら	様市第3地跡	縄文、弥生	集落跡	縄文土器(早期・中期)、 弥生土器	
33	IF69-2983	ホクリ貝塚	ほくりかひづか	様市第2地跡	縄文、古代	貝塚	縄文土器、弥生土器、 カキ、ミナライ、土師器	
34	IF77-0201	黒沢鉄山	ほそざわでつざん	様市第74地跡	近世	製鉄関連	鉄滓	
35	IF77-1027	湯川鉄山	にごりがわでつざん	様市第73地跡	近世	製鉄関連	鉄滓	
36	IF79-0123	小田の沢鉄山	おだのさわでつざん	様市第3地跡	近世	製鉄関連	鉄滓	
37	IF79-0351	八木貝塚	やまがひづか	様市第1地跡	縄文	貝塚	縄文土器(晩期)、鹿角	
38	IF79-0373	船山	ふねやま	様市第1地跡	縄文、古墳	集落跡	縄文土器(中・後期)、石 製製品(古墳時代)	
39	IF79-1245	長坂	ながさか	小内第1地跡	縄文	散石地	縄文土器(後・晩期)	
40	IF79-1358	小内貝塚	おこなひづか	小内第5地跡	縄文	貝塚	弥生土器(後期)、石器、 土師器	
41	IF79-2344	栗マツ貝塚	くりまつかひづか	有家第2地跡	縄文、古代	貝塚	縄文土器(後期)、石器、 土師器	
42	IF89-0330	向谷戸	むかいおりど	有家第3地跡	縄文	集落跡	縄文土器(晩期)、石斧	
43	IF89-0340	上のマツカ	うゑのまつか	有家第5地跡	縄文	集落跡	縄文土器(前・後期)、石斧、 須石	範囲変更(平成23年度)
44	IF89-0353	有家前	うけで	有家第5地跡	中世	城跡跡	平基、堀跡(城跡)	昭和59年度調査、範囲変更(平成23年度)

第1表 町内の遺跡一覧(1)

№	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺跡・遺物	備考
45	IF99-1153	芦毛渡跡山	あしげわたりてつざん	中野第7地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
46	IG80-0056	有家台場	うげだいば	有家第8地割	近世	砲台跡跡	土器	昭和59年度調査
47	IG80-1006	大宮Ⅱ	おおみやに	中野第2地割	縄文、弥生	散石地	縄文土器(早期)、弥生土器	
48	IG80-1008	大宮Ⅰ	おおみやいち	中野第2地割	縄文、弥生	集落跡	縄文(居・所・晩期)、石器、弥生土器	
49	IG80-1063	長根塚	ながねづか	中野第2地割	縄文	散石地	縄文土器	
50	IG80-2004	中野原(南極・朝夷館)	なかのだけ	中野第4地割	中世	城跡跡	平瓦、塼跡(礎礎)	昭和59年度調査
51	IG90-0005	般若塚	えんぱづか	中野第11地割	縄文	集落跡	縄文土器	範囲変更(平成23年度)
52	IG90-0085	藤好沢	ふじよしざわ	中野第7地割	縄文	集落跡	縄文土器(新・晩期)、石刀	
53	IF38-1072	アイヌ森	あいぬもり	藤市第39地割	縄文・弥生・古代	散石地	縄文土器(新・晩期)、縄文陶器(土器・土師器の土器)、石器、土師器	明治参上、沼澤遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
54	久番	-	-	-	-	-	-	主ノ沢遺跡登録抹消(範囲・名称変更のため)
55	IF48-0194	平内Ⅱ	ひらいさん	藤市第34地割	縄文	散石地	縄文土器(中期)、磨石	明治参上、範囲変更(平成23年度)
56	IF48-1025	石倉	いしくら	藤市第37地割	縄文、古代	散石地	縄文土器(晩期)、磨石、縄文土師器	明治参上、範囲変更(平成23年度)
57	IF48-2023	蟹割	ひつわり	藤市第30地割	縄文	散石地	石斧	
58	IF96-1358	ニサナドウ	にさなどう	藤市第63地割	縄文、古代	散石地	縄文土器(晩期)、土師器、瓦跡	
59	IF97-2323	高取Ⅰ	たかとりいち	藤市第21地割	縄文	散石地	縄文土器	
60	IF97-2329	高取Ⅱ	たかとりに	藤市第21地割	縄文	集落跡	縄文土器(中・晩期)	
61	IF99-0042	戸畑家	へらけ	藤市第11地割	縄文	散石地	縄文土器(晩期)、土師	
62	IF99-2113	山山	やまやま	藤市第6地割	縄文	散石地	縄文土器	
63	IF48-2337	田ノ沢	たのさわ	藤市第7地割	縄文	散石地	縄文土器(晩期)	
64	IF99-0378	向長塚	むかいながね	有家第8地割	縄文	散石地	縄文土器	
65	IF48-0017	平内Ⅰ	ひらいに	藤市第43地割	縄文、弥生、古墳	散石地、弥生集落跡	聖穴住居跡、屋外炉、土坑、溝渠跡、集石、溝渠、中世(中期末～前期前半)、弥生土器(前期前半)、土師器、石斧、石製品、鉄製品、磨石、鏡跡	明治参上、平成11～13年度、平成23年度本発掘調査、範囲変更(平成23年度)
66	IF79-0119	大沢	おおはま	藤市第3地割	縄文	集落跡	縄文土器、石器	
67	IF99-1109	畑	たて	藤市第7地割	縄文	集落跡	縄文土器(中期)	
68	IF96-2350	大沢	おおさわ	藤市第66地割	縄文	散石地	縄文土器	平成13年度新発見
69	IF28-0098	二十一平	にじゅういちたい	藤市第41地割	古代	製塩遺跡	製塩土器、土師土師、土師	明治参上、平成15年度新発見、範囲変更(平成23年度)
70	IF99-2161	玉川Ⅰ	たまがわいち	藤市第13地割	縄文	散石地	縄文土器(早期)	
71	IF99-2038	玉川Ⅱ	たまがわに	藤市第14地割	縄文	散石地	縄文土器(前期)	
72	IF99-1126	馬場	ばば	藤市第7地割	縄文	散石地	縄文土器	平成16年度新発見、範囲変更(平成23年度)
73	IF99-0314	八森	はちもり	有家第3地割	縄文、奈良	集落跡	聖穴住居跡、縄文土器、石器、土師器	明治参上、平成16年度新発見、範囲変更(平成23年度)、平成26年度本発掘調査
74	IF96-0118	河田Ⅱ	わかいだに	大野第20地割	縄文	散石地	縄文土器	
75	IF96-0137	河田	わかいだ	大野第23地割	縄文	散石地	縄文土器(晩期)、石器	
76	IF96-0144	河田Ⅰ	わかいだいち	大野第20地割	縄文	散石地	縄文土器(晩期)、石器	
77	IF97-1062	朝戸原	あしたで	大野第29地割	中世	城跡跡	平瓦、土器、塼跡、平埴	昭和59年度調査
78	IF87-2100	萩の渡	はぎのわたり	大野第36地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
79	IF87-2366	山山(朝夷館)	やまやまだて	大野第49地割	中世	城跡跡	塼跡、平埴	昭和59年度調査
80	IF88-2284	平転ばし林原	うしろこまばしやしだて	大野第55地割	中世	城跡跡	塼跡、平埴	昭和59年度調査
81	IF96-0272	たてひら原	たてひらゆた	大野第13地割	中世	城跡跡	塼跡、塼跡、平埴	昭和59年度調査
82	IF96-0387	長根	ながね	大野第72地割	縄文	散石地	縄文土器(新・晩期)、石	
83	IF96-1280	般若森原	えんぱもりだて	大野第10地割	中世	城跡跡	塼跡、塼跡、平埴	昭和59年度調査
84	IF96-2238	藤原Ⅱ	よこさしざわに	大野第4地割	縄文	散石地	石器、磨石	
85	IF96-2349	藤原Ⅰ	よこさしざわいち	大野第5地割	縄文	散石地	磨石、石	
86	IF96-2316	大野館	おののだけ	大野第5地割	中世	城跡跡	平埴	昭和59年度調査
87	IF97-0012	ひともちこ館	ひともちこだけ	大野第69地割	中世	城跡跡	平瓦、塼跡、平埴、聖穴	昭和59年度調査
88	IF97-2055	金ヶ沢	かねがさわ	大野第59地割	縄文	散石地	縄文土器(前期)	

第1表 町内の遺跡一覧(2)

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺跡・遺物	備考
89	JP98-1269	阿子木館	あこぎだて	阿子木第4地割	中世	城跡跡	単郭、堀跡、墓穴	昭和59年度調査
90	JP98-0168	高森Ⅱ	たかもりに	大野第57地割	縄文	散布地	縄文土器	
91	JP98-2061	上水沢Ⅰ	かみみずさわいち	水沢第5地割	縄文	散布地	縄文土器	
92	JP98-2188	上水沢Ⅱ	かみみずさわに	水沢第7地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器（埴・埴器）、弥生土器、土器山、石器、アスファルト塊、鉄製品、銅質、陶磁器（瓦・瓦片）	昭和57、平成12年度本発掘調査
93	JP98-2196	上水沢Ⅲ	かみみずさわさん	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
94	JP98-2204	高森Ⅰ	たかもりいち	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
95	JP98-2272	上水沢Ⅳ	かみみずさわよん	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
96	JP98-2275	上水沢Ⅴ（観音館）	かみみずさわご	水沢第7地割	中世	城跡跡	単郭	
97	JP98-2288	下木沢Ⅰ	しもみずさわいち	水沢第8地割	縄文	散布地	縄文土器	昭和59年度調査
98	JP98-2294	上水沢Ⅵ	かみみずさわろく	水沢第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
99	JP98-0067	坂内	つつみない	大野第57地割	縄文	散布地	縄文土器	
100	JP98-0129	日吉Ⅰ	ひなたいち	大野第57地割	古代	散布地	土師器	
101	JP98-0186	下帯島Ⅰ	しもたいしまいち	帯島第11地割	縄文	散布地	縄文土器	
102	JP98-0221	日吉Ⅱ	ひなたに	阿子木第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
103	JP98-0225	阿子木	あこぎ	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器	
104	JP98-1108	下帯島Ⅱ	しもたいしまに	帯島第11地割	縄文	散布地	縄文土器	
105	JP98-1156	観音館Ⅰ	えぞだていち	帯島第5地割	中世	城跡跡	平城、堀跡	昭和59年度調査
106	JP98-1199	上帯島Ⅰ	かみたいしまいち	帯島第8地割	縄文	散布地	縄文土器	
107	JP98-1225	二ッ所	ふたつや	阿子木第18地割	縄文	散布地	縄文土器	
108	JP98-1254	下帯島Ⅱ	しもたいしまさん	阿子木第18地割	古代	散布地	土師器	
109	JP98-1272	下帯島Ⅲ	しもたいしまよん	帯島第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
110	JP98-1375	二ッ所向	ふたつやむかい	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器	
111	JP98-1398	長塚Ⅰ	ちようづかもりいち	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器	
112	JP98-2059	高森Ⅲ	たかもりさん	帯島第4地割	縄文	散布地	縄文土器	
113	JP98-2073	大渡Ⅱ	おおわたりよん	帯島第1地割	縄文	散布地	縄文土器	
114	JP98-2081	大渡Ⅲ（観音館）	おおわたご	帯島第1地割	中世	城跡跡か？	単郭、堀跡	昭和59年度調査
115	JP98-2111	観音館Ⅱ	えぞだて	帯島第4地割	中世	城跡跡	単郭、堀跡	昭和59年度調査
116	JP98-2117	関口Ⅰ	せきぐちいち	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
117	JP98-2127	関口Ⅱ	せきぐちに	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
118	JP98-2148	上帯島Ⅱ	かみたいしまに	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
119	JP98-2194	上帯島Ⅲ	かみたいしまさん	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
120	JP98-2211	上帯島Ⅳ	かみたいしまよん	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
121	JP98-2269	帯栄Ⅰ	いやすかいち	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
122	JP98-2267	帯栄Ⅱ	いやすかさん	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
123	JP98-2298	帯栄Ⅲ	いやすかよん	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
124	JP98-2301	帯栄Ⅳ	いやすかご	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
125	JP98-2304	帯栄Ⅴ	いやすかろく	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
126	JP98-2318	長塚Ⅱ	ちようづかもりに	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器（埴器）、甕	
127	JP98-2322	帯栄Ⅵ	いやすかなな	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
128	JP98-2353	帯栄Ⅶ	いやすかはら	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
129	JP98-2357	帯栄Ⅷ	いやすかじゅう	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
130	JP98-2371	帯栄Ⅷ	いやすかじゅう	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
131	JP98-2373	帯栄Ⅸ	いやすかじゅういち	帯栄	縄文	散布地	縄文土器	
132	JP98-2380	帯栄Ⅹ	いやすかじゅうに	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
133	JP98-1022	長塚Ⅲ	ちようづかもりさん	阿子木第12地割	縄文	散布地	石環	
134	JP98-1051	長塚Ⅳ	ちようづかもりよん	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器	
135	JP98-2071	帯栄Ⅺ	いやすかに	帯島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
136	JP98-0140	上水沢Ⅶ	かみみずさわなな	水沢第3地割	縄文	散布地	縄文土器（埴器）	
137	JP98-0218	下水沢Ⅱ	しもみずさわに	水沢第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
138	JP98-0266	赤瀬Ⅰ	あせまふいち	水沢第12地割	近世	製鉄関連	鑛の印、鉄滓	

第1表 町内の遺跡一覧（3）

No	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
186	IF48-1049	西平内Ⅱ	にしひらないに	横浜市第37地割	縄文	散布地	縄文土器(前期)、石器	昭和58年2、平成23年度新発見
187	IF48-1115	東平内Ⅰ	ひがしひらないに	横浜市第34地割	縄文	散布地	縄文土器、石斧、副土器、土器、土器	昭和58年2、平成23年度新発見
188	IF48-1039	東平内Ⅱ	ひがしひらないに	横浜市第34地割	縄文	散布地	縄文土器	昭和58年2、平成23年度新発見
189	IF48-1080	東平内Ⅲ	ひがしひらないに	横浜市第34地割	不明	製鉄関連	沼、鉄滓	昭和58年2、平成23年度新発見
190	IF47-1300	穂沢Ⅰ	うばさわい	横浜市第47地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)、石斧、土器、土器	昭和58年2、平成23年度新発見
191	IF47-1288	穂沢Ⅱ	うばさわい	横浜市第47地割	縄文、古代	散布地	縄文土器、石斧、土器	昭和58年2、平成23年度新発見
192	IF47-1360	穂沢Ⅲ	うばさわい	横浜市第47地割	縄文	散布地	縄文土器(厚・長形)、副土器、石斧、土器、土器	昭和58年2、平成23年度新発見
193	IF47-1342	穂沢Ⅳ	うばさわい	横浜市第47地割	縄文	散布地	縄文土器(中期)、副土器、土器、土器	昭和58年2、平成23年度新発見
194	IF48-1197	溝田Ⅱ	みなみかわり	横浜市第28地割	縄文	集落跡、狩猟場跡	壺穴住居跡、土坑、副土器、土器、土器	昭和58年17、平成25年度新発見、平成26年度本発掘調査
195	IF48-2128	サンニヤⅠ	さんにやい	横浜市第25地割	縄文	集落跡、狩猟場跡、散布地	壺穴住居跡、副土器遺構(土坑、他)、土器、縄文土器、土器、副土器	昭和59年9・13・17、平成25年度新発見、平成27年度・28年度本発掘調査
196	IF58-0288	北産雑	きたかみか	横浜市第18地割	縄文	集落跡、狩猟場跡	壺穴住居跡、副土器遺構(土坑、他)、土器、縄文土器、土器	昭和59年12、平成25年度新発見、平成27年度・28年度本発掘調査
197	IF58-1354	東産雑Ⅱ	あづまかほまに	横浜市第15地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)、土器	平成25年度新発見
198	IF58-1399	東産雑Ⅰ	あづまかほまに	横浜市第15地割	縄文	散布地	縄文土器、土器	平成25年度新発見、範囲変更(平成29年度)
199	IF69-1199	塚江	しほくのへ	横浜市第5地割	縄文	散布地	縄文土器、土器	平成25年度新発見
200	IF69-2273	小田ノ沢	このだのさわ	横浜市第3地割	縄文	散布地	土器	平成25年度新発見
201	IF79-1217	南八木	みなみやぎ	横浜市第1地割	平安	製鉄関連	沼、鉄滓	平成25年度新発見
202	IF98-1394	下向Ⅰ	しもむかい	中野第1地割	縄文、養生	狩猟場跡	副土器遺構、土坑、縄文土器、副土器、土器	昭和58年6、平成25年度新発見、平成29年度本発掘調査
203	IF89-2323	中野城内	なかのじょうない	中野第1地割	縄文	狩猟場跡	副土器遺構、土坑、土器、土器	昭和58年14、平成25年度新発見、平成29年度本発掘調査
204	IF89-1322	黒坂	くろさか	有家第9地割	縄文	集落跡	副土器遺構	昭和58年15、平成26年度新発見、平成26年度本発掘調査
205	IF48-2251	サンニヤⅡ	さんにやい	横浜市第25地割	縄文、古代	集落跡	壺穴住居跡、土坑、副土器遺構(土坑、他)、土器、土器	昭和58年15・16、平成26年度新発見、平成26年度本発掘調査
206	IF58-1333	西産雑Ⅰ	みなみかほまに	横浜市第16-17地割	縄文	集落跡	壺穴住居跡、溝跡、土坑、副土器遺構(土坑、他)、土器、土器	昭和58年15、平成26年度新発見、平成26年度本発掘調査
207	IF57-0174	籠野	たての	横浜市第53地割	古代	散布地、製鉄関連	製鉄土器(古代)、鉄滓	平成27年度新発見、製鉄関連は時代不明
208	IF59-2021	北玉田	きたたまがわ	横浜市第14地割	縄文	散布地	縄文土器	平成27年度新発見
209	IF37-2343	田ノ端Ⅱ	たのへたに	横浜市第44地割	縄文	狩猟場跡、散布地	副土器遺構、縄文土器、副土器	平成25年度新発見
210	IF58-0245	泉津内	あづまづない	横浜市第20地割	縄文	狩猟場跡、散布地	副土器遺構、土坑、土器、土器	平成28年度新発見
211	IF67-2255	松ヶ沢Ⅰ	まつがさわい	横浜市第73地割	縄文	散布地	土器、土器	平成28年度新発見
212	IF58-2312	東産雑Ⅱ	あづまかほまに	横浜市第15地割	縄文	散布地	副土器遺構	平成28年度新発見
213	IF79-0012	観石	つづくいし	横浜市第9地割	縄文	散布地	縄文土器、土器	平成29年度新発見
214	IF96-2265	新田	しんでん	大野第14地割	近世	製鉄関連	鉄滓	平成29年度新発見
215	IF85-2235	一本松Ⅰ	いっぴんまつむかい	大野第15地割	縄文、古代、近世	散布地、製鉄関連	縄文土器、土器、鉄滓	平成29年度新発見、製鉄関連は時代不明
216	IF96-2053	一本松Ⅱ	いっぴんまつむかい	大野第15地割	縄文、近世	散布地、製鉄関連	縄文土器、鉄滓	平成29年度新発見、製鉄関連は時代不明
217	IF58-1170	飯橋	いしばし	横浜市第21地割	縄文	狩猟場跡	副土器遺構	平成29年度新発見
218	IF48-2250	サンニヤⅢ	さんにやい	横浜市第25地割	縄文	狩猟場跡	副土器遺構、縄文土器、土器	昭和58年17、平成29年度本発掘調査
219	IF47-2265	松ヶ沢Ⅱ	まつがさわい	横浜市第74地割	不明	製鉄関連	鉄滓	平成29年度新発見
220	IF99-0251	下向Ⅱ	しもむかい	中野第1地割	縄文	狩猟場跡	副土器遺構、土坑	平成30年度新発見

第1表 町内の遺跡一覧(5)

《備考欄の文献について、それぞれ次のように略した》

- 「※1」 岩手県種市町教育委員会 2004「平内Ⅱ道跡発掘調査報告書」 種市町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「※2」 岩手県種市町教育委員会 2005「種市町内道跡詳細分布調査報告書Ⅰ」 種市町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「※3」 岩手県洋野町教育委員会 2013「平内Ⅱ道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「※4」 岩手県洋野町教育委員会 2015「平内Ⅱ道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「※5」 岩手県洋野町教育委員会 2017「ゴッソー道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 「※6」 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996・2001「ゴッソー道跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集・第357集
- 「※7」 岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002
「上水沢Ⅱ道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集
- 「※8」 (公財)岩手県文化振興事業団 2015「平成26年度発掘調査報告書 南川尻道跡 下向道跡 沼袋Ⅱ道跡
沼袋Ⅲ道跡 八幡沖道跡 はか調査概報(39道跡)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集
- 「※9」 (公財)岩手県文化振興事業団 2016「平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ道跡 房の沢Ⅳ道跡 白石道跡 はか調査概報(33道跡)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集
- 「※10」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2017
「西平内Ⅰ道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
- 「※11」 (公財)岩手県文化振興事業団 2017「平成28年度発掘調査報告書 岩洞ⅦⅠ道跡 柄洞Ⅳ道跡 八森道跡 はか調査概報(28道跡)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集
- 「※12」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2018
「北鹿糠道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集
- 「※13」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2018
「サンニヤⅠ道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第687集
- 「※14」 (公財)岩手県文化振興事業団 2018「平成29年度発掘調査報告書 岩洞ⅦⅠ・Ⅱ道跡 和野新熊神社道跡 北野Ⅹ道跡 木戸場道跡 中野城内道跡 沼里道跡 根井沢穴田Ⅳ道跡 耳取Ⅰ道跡 千蔵城道跡
はか調査概報(23道跡)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集
- 「※15」 岩手県教育委員会 平成28年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成26年度 復興関係)」
岩手県文化財調査報告書第146集
- 「※16」 岩手県教育委員会 平成29年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成27年度 復興関係)」
岩手県文化財調査報告書第149集
- 「※17」 岩手県教育委員会 平成30年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成28年度 復興関係)」
岩手県文化財調査報告書第152集

Ⅲ. 西平内 I 遺跡の自然科学分析

1. 堆積物及び炭化材・岩石の分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

西平内 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町に所在し、浪谷川右岸の白前段丘川尻面に立地する。

平成 26 年、27 年に公益財団法人岩手県文化振興財団により実施された発掘調査では、縄文時代後期初頭から前葉を中心とする遺構・遺物が検出された（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団,2017）。特に注目される遺構として、弧状の石列 1 基とその外側に同じく弧状を呈する集石遺構群が確認された。また、これらを覆う 2 枚の整地層が確認されている。上記の結果を受け、平成 28 年度に洋野町教育委員会によるハンドボーリング調査が実施され、弧状の石列が環状列石であることが想定されていた（洋野町教育委員会,2019）。令和元年に洋野町教育委員会により実施されたトレンチ調査では、環状列石を構成する礎の一部が確認され、その規模や形状についてより詳細に判明しつつある。

本分析調査では、令和元年に実施されたトレンチ調査において環状列石付近から出土した炭化材について樹種同定を行い、木材利用について検討する。また、同調査で確認された礎の中には被熱痕跡を有するものがあることから、被熱温度などを推定するため岩石内眼鑑定・岩石薄片作製鑑定を実施する。合わせてトレンチ断面の現地調査および試料採取を行い、軟 X 線写真撮影の結果などを踏まえて、環状列石を覆う整地土層の構造などを検討する。

(1) 炭化材同定

①試料

試料は、環状列石付近から出土した炭化材 20 点である。試料の詳細は結果とともに表に示す。

②分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

③結果

結果を第 2 表に示す。炭化材は、いずれも小片で、中には年輪界を含む 1 年輪以上が存在しない個体もある。また、保存状態が悪いものも多い。20 点全てがコナラ属コナラ亜属であることは確かだが、コナラ節とクスギ節を区別するための孔圏外の道管配列が欠損等により不明な個体がある。孔圏外の道管配列が確認できるものは全てコナラ節であったが、不明瞭なものはコナラ亜属までにとどめている。以下に典型的な個体の解剖学的特徴を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen.

Quercus sect. Prinus) プナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1～20細胞高程度のもと複合放射組織とがある。

④考察

検出された種類は全てコナラ亜属である。コナラ亜属の材は重堅で炭になりやすいこと、炭になっても堅いため土壌中でも残りやすいことが原因と思われる。伊東隆夫・山田昌久編(2012)の出土木製品用材データベースをみると、限内の縄文時代の炭化材の出土例は、クリが多く、次いでコナラ節が多い。また、遺跡の立地から、コナラ亜属など落葉広葉樹が多いと考えられることから、調和的といえる。

試料名			樹種
NHI. 19	9/5	C-C16	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C17	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C18	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C19	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C20	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C21	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C22	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C23	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C24	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C25	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C26	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C27	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C28	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C29	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C30	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C31	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C32	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C33	コナラ亜属コナラ節
NHI. 19	9/5	C-C35	コナラ亜属
NHI. 19	9/5	C-C35	コナラ亜属コナラ節

第2表 樹種同定結果

(2) 岩石肉眼鑑定・岩石薄片作製鑑定

①試料

岩石肉眼鑑定の対象とした試料はAトレンチ内から出土した礫36点である。角礫状～薄板状を示し、礫径は最大のもので約20cmである。全点について肉眼観察を行い、岩種を確認したうえで、被熱の痕跡が認められる試料2点を選択、薄片作製鑑定を行い、鏡下における焼成鉱物の有無を確認する。

②分析方法

1. 岩石肉眼鑑定

野外用ルーペもしくは実体顕微鏡を用いて試料を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。岩石名の決定に際しては、五十嵐2006の分類に基づく。試料の大部分は薄片作製鑑定、X線回折分析、蛍光X線分析を実施していないため、鑑定された岩石名は概査的なものである点に留意されたい。

2. 岩石薄片作製鑑定

薄片観察は、岩石を0.03mmの厚さに研磨した薄片を顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片用の岩石チップは、ダイヤモンドカッターにより切断・整形する。チップの片面を#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で研磨した後、プレバラートに貼り付ける。プレバラートに貼り付けたチップは、ダイヤモンドカッターにより薄く切断する。プレバラート上のチップは、#180～#800の研磨剤を用い、研磨機上で厚さ0.05mm以下になるまで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて研磨し、正確に0.03mmの厚さに調整する。プレバラート上で薄くなった薄膜状の岩石片の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察記載を行う。

③結果

1. 岩石肉眼鑑定

岩石肉眼鑑定の結果を第3表に示す。花崗斑岩2点、アブライト1点、黒雲母花崗岩30点、片状黒雲母花崗岩3点に鑑定された。

2. 岩石薄片作製鑑定

偏光顕微鏡下における観察から構成鉱物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量 (>50%)、中量 (20~50%)、少量 (5~20%)、微量 (<5%) およびきわめて微量 (<1%) という基準で目視により判定した。構成鉱物の量比は第4表に示した。顕微鏡観察に際しては下方ポラーラおよび直交ポラーラ下において代表的な箇所を撮影し、写真図版3に示した。以下に鏡下観察結果を述べる。

A-S 25

岩石名：アブライト

岩石の組織：完晶質花崗岩状組織 (holocrystalline granitic texture)

主成分鉱物

石英：中量存在し、粒径0.06~2.7mmの他形で不定形状を呈し、粒間充填物をなすものやミルメカイト組織を形成するものが認められる。波動消光を示すものが散見される。

カリ長石：多量存在し、粒径0.8~5mmの半形~他形で不定形板状を呈し、マイクロバースサイト組織を示す。

副成分鉱物

斜長石：微量存在し、粒径最大0.67mmの半自形で厚板状~不定形板状を呈し、集片双晶が発達する。

黒雲母：きわめて微量存在し、粒径最大1.2mmの他形で板状~不定形板状を呈し、淡褐色~暗褐色の多色性を示す。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径0.2~0.7mmの他形で不定形粒状を呈し、苦鉄質鉱物と接して分布する。

注記	番号	石質	分析
A-S	1	黒雲母花崗岩	
A-S	4	黒雲母花崗岩	
A-S	6	片状黒雲母花崗岩	
A-S	7	黒雲母花崗岩	
A-S	9	黒雲母花崗岩	
A-S	11	花崗斑岩	
A-S	12	黒雲母花崗岩	
A-S	13	黒雲母花崗岩	
A-S	14	黒雲母花崗岩	
A-S	15	片状黒雲母花崗岩	
A-S	18	黒雲母花崗岩	
A-S	20	黒雲母花崗岩	
A-S	21	黒雲母花崗岩	
A-S	22	黒雲母花崗岩	
A-S	23	黒雲母花崗岩	
A-S	24	花崗斑岩	
A-S	25	アブライト	岩石薄片作製鑑定
A-S	26	黒雲母花崗岩	
A-S	27	黒雲母花崗岩	岩石薄片作製鑑定
A-S	28	黒雲母花崗岩	
A-S	30	黒雲母花崗岩	
A-S	32	黒雲母花崗岩	
A-S	34	黒雲母花崗岩	
A-S	35	黒雲母花崗岩	
A-S	37	黒雲母花崗岩	
A-S	40-1	片状黒雲母花崗岩	
A-S	43	黒雲母花崗岩	
A-S	44	黒雲母花崗岩	
A-S	45	黒雲母花崗岩	
A-S	46	黒雲母花崗岩	
A-S	47	黒雲母花崗岩	
A-S	54	黒雲母花崗岩	
A-S	55	黒雲母花崗岩	
A-S	56	黒雲母花崗岩	
A-S	57	黒雲母花崗岩	
A-S	58	黒雲母花崗岩	

第3表 岩石肉眼鑑定結果

試料名	岩石名	構成鉱物				変質鉱物		その他
		石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	不透明鉱物	赤鉄鉱	
A-S 25	アブライト	○	○	+	±	+	+	±
A-S 27	黒雲母花崗岩	○	○	△	+	±	+	±

量比 ○：多量(>50%) ○：中量(20~50%) △：少量(5~20%)
+：微量(<5%) ±：きわめて微量(<1%)

第4表 構成物量比

変質鉱物

セリサイト：きわめて微量存在し、粒径0.03mm以下の他形で葉片状を呈し、斜長石内部に存在する。

赤鉄鉱：きわめて微量存在し、粒径最大0.4mmの他形～半自形を呈し、水酸化鉄を伴って分布する。

その他

水酸化鉄：きわめて微量存在し、他形で不定形状を呈し、偏在して分布する。

・A-S 27

岩石名：黒雲母花崗岩

岩石の組織：完晶質花崗岩状組織 (holocrystalline granitic texture)

主成分鉱物

石英：中量存在し、粒径0.06～2.9mmの他形で不定形状を呈し、粒間充填状をなすものやミルメカイト組織を形成するものが認められる。

カリ長石：中量存在し、粒径0.3～4.9mmの他形で不定形状を呈し、やや変質して汚濁しており、不明瞭なマイクロバースイト組織を示すものが散見される。

斜長石：少量存在し、粒径0.2～2.9mmの半自形で厚板状～不定形板状を呈し、葉片双晶が発達する。

副成分鉱物

黒雲母：微量存在し、粒径0.3～1.9mmの他形で板状～不定形板状を呈し、淡褐色～暗褐色の多色性を示す。

チタン石：きわめて微量存在し、粒径最大0.17mmの他形で不定形状を呈し、淡褐色を示す。結晶度は良好であり、黒雲母と共生する。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大0.4mmの自形～半自形で多角形状～不定形状を呈し、石英やカリ長石の粒間を埋めて分布する。

変質鉱物

赤鉄鉱：きわめて微量存在し、粒径最大0.4mmの他形～半自形を呈し、水酸化鉄を伴って分布する。

その他

水酸化鉄：きわめて微量存在し、他形で不定形状を呈し、偏在して分布する。石英などに発達するクラックや、斜長石のアルバイト双晶に沿って生じている。

④考察

A-S 25は黒雲母などの苦鉄質鉱物が乏しいアブライトに鑑定された。本試料は、苦鉄質鉱物に乏しく、カリ長石の巨晶を含有するため、外観が一般的な花崗岩とは異なる様相を示す。肉眼では被熱の痕跡と推定された褐色を呈する部分が薄片上では片面側に偏在しているが、これらの多くは水酸化鉄の濃集部にあたり、きわめて微量の赤鉄鉱が生じている。このことから、水酸化鉄が赤鉄鉱へ変化する270～325℃程度以上(吉木, 1959)の熱を受けていると判断できる。

A-S 27は、黒雲母などの苦鉄質鉱物を含む黒雲母花崗岩に鑑定された。肉眼では褐色を呈する部分が薄片上ではA-S 25に比較して薄く偏在している。褐色を呈する部分の多くはA-S 25と同様に水酸化鉄の濃集部にあり、きわめて微量の赤鉄鉱が生じており、A-S 25と同程度の温度で被熱したと判断できる。

岩石肉眼鑑定の結果から確認された岩種について見ると、花崗岩類を主体とし、花崗斑岩、アブライトが少量混じる組成であった。花崗斑岩およびアブライトは花崗岩類に随伴して産出する岩石であり、遺跡が所在する洋野町には花崗岩体の分布があるため、環状列石を構成する礫は遺跡周辺において採取されたものと考えられる。

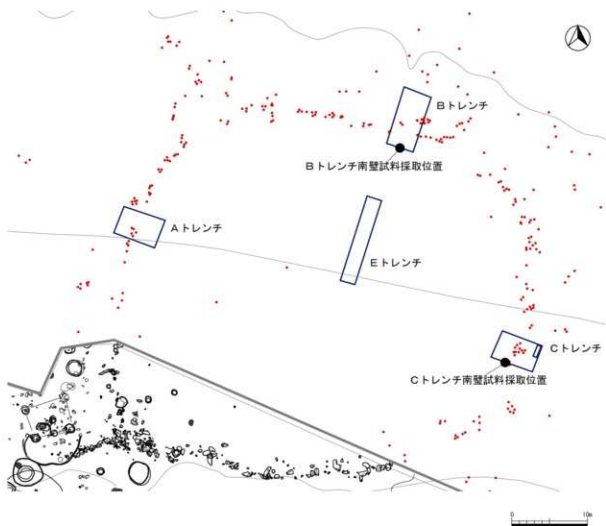
(3) 堆積物の分析

① 試料

試料は弊社技師2名が2019年10月9日に試掘調査現場に赴き、Bトレンチ、Cトレンチの2箇所から柱状試料を採取した。採取箇所を第5図に、ブロックサンプルを写真図版1に示し、採取箇所の層序観察結果を下記する。

1. Bトレンチ

環状列石の北端と想定される位置に設定されたトレンチで、層序の観察および試料採取は南壁で実施した。現地表面から環状列石確認までは約50cmを測る。15cmまでは現表土でありI層とした。I層は黒ボク土を気質として小礫、橙色の火山灰が微量混じり、空隙が多く締まりは弱い。I層の下位は縄文時代の遺物包含層と想定したII層が堆積する。黒ボク土主体で上部のII-3層は黒灰色であり、橙色の火山灰が微量に混じる。やや空隙が多く、締りはやや弱い。下部のII-4層はII-3層に比して黒味が強く、下部にはブロック状の橙色火山灰が偏在する。II-4層の下位には橙色の火山灰層が堆積するが、これをIII層と呼称する。本調査地点では環状列石を覆う整地土層は確認されない。現地表面から遺構確認面までの柱状試料を採取し、軟X線写真を撮影した。



第5図 柱状試料採取位置

2. Cトレンチ

環状列石の東端と想定される位置に設定されたトレンチで、層序の観察および試料採取は南壁で実施した。現地表面から環状列石確認面までは約50cmを測る。10cmまでは現表土でありI層とした。層相はBトレンチと同じである。I層の下位では2枚の整地層と考えられる層が確認された。上位層をII-1層、下位層をII-2層と呼称する。II-1層は黒ボク土主体で暗褐色を呈し、層厚は約5cmを測る。空隙は少なく、やや強く締まる。橙色の火山灰がブロック状に多く混じる。II-2層もII-1層とほぼ同様の様相を示すが、やや空隙が多く締りが弱くなる。II-2層は下層とは不整合である。II-2層より下はBトレンチと同じ様相を示す。

本調査地点では環状列石を覆う整地土層2枚が確認された。現地表面から遺構確認面までの柱状試料を採取し、軟X線写真を撮影するとともに、各層に混在する火山灰および火山灰層であるIII層についてテフラの概査を実施した。

②分析方法

採取した柱状試料について、X線写真撮影観察を実施する。試料は厚さ1cmまで板状に成形し、湿潤状態のままエクストロン・インターナショナル株式会社製MG165/45を用いて、管電圧40kV、撮影電流20mA、撮影距離100cm、撮影時間120秒の条件でX線写真撮影を実施した。なお、X線写真では礫や酸化鉄など密度の高い物質が明色（白色）を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

③結果

柱状試料表面の写真およびX線写真を写真図版1に示す。以下に軟X線写真で認められる堆積・土壌構造および推定される成因等について述べる。なお、Cトレンチ南壁についてはテフラ概査を実施したので、合わせて結果を述べる。

両試料ともに、軟X線写真撮影の結果を見ると、火山灰が多く混じる部分は白色が強く、黒ボク土主体の部分については弱く表現される。やや崩れてはいるがIII層のブロック状に残る部分は白色が強く出ている。II層中にも部分的に白色が強い部分があるが、下位の火山灰が混在しているものと考えられる。

Cトレンチ南壁では、整地土層とされるII-1、II-2層で特に白色が強く出ている。現地調査所見でも火山灰が多く混在する様相が観察されたことと矛盾しない。また、Bトレンチ同様、III層は斑状に白色が強い部分が観察される。

また、Cトレンチ南壁のII-1層最上部には縦縞状の構造が見て取れる。それほど明瞭ではないものの、旧地表面の可能性を示すものとして注目される。

テフラ概査はCトレンチ南壁の整地土層とされるII-1とII-2および、縄文時代遺物包含層であるII-4層、火山灰層であるIII層で実施した。以下にその結果を述べる。

II-1層とII-2層の試料について、砂分の主体は斜長石と両輝石の遊離結晶であり、軽石が少量、火山ガラスが微量、スコリアが極めて微量含まれる。軽石の特徴は白色で発泡やや良好～やや不良のものが多く、白色で発泡良好のものもわずかに混在する。火山ガラスはスポンジ状に発泡した軽石型を呈し、スコリアは黒色または暗褐色で発泡は不良～やや不良である。これらの様相から、整地層II-1、II-2に混在するテフラは攪乱を受けた十和田中振テフラ(ToCu)と考えられる。

II-4層の試料について、砂分の主体はII-1層やII-2層の試料と同様に斜長石と両輝石の遊離結晶であるが、極めて微量の角閃石の遊離結晶も含まれることが注目される。軽石は少量、火山ガラスは微量、スコリアは極めて微量という産状は、II-1層とII-2層の試料に類似するが、軽石の特徴が若干異なり、白色で発泡良好の軽石が主体となる。火山ガラスはスポンジ状に発泡した軽石型であるが、II-1層やII-2層の火山ガラスに

比べるとより発泡度の高いものが多く認められる。Ⅲ層の試料はⅡ-4層とはほぼ同様の様相を示すが、スコリアがほとんど含まれない。これらの様相から、Ⅲ層は十和田八戸テフラ層(To-H)であり、Ⅱ-4層の試料はその再堆積ブロックと考えられる。

(4) 考察

上述のようにトレンチ調査で観察された2箇所の断面について分析を行った。以下ではこれらをまとめ、整地土層について検討する。

・Cトレンチ南壁で観察された整地土層2枚は、黒ボク土と十和田中振テフラ(To-Cu)が混在した層と考えられる。To-Cuの噴出年代は、暦年で6200年前であり、縄文前期に対比される。縄文時代後期とされる環状列石を覆う土にTo-Cuが含まれている点は、本調査でⅡ-1層、Ⅱ-2層と呼称した層が人為的に造成された整地土層であることを支持する結果である。

・整地土層と考えられるCトレンチ南壁のⅡ-1層最上部では、不明瞭ではあるが縦溝状の構造が観察され、旧地表面を示す可能性があるものとして注目される。今後、環状列石の別箇所でも同様の分析を実施し、構造をより詳細に検討する必要がある。

・環状列石の北端部に設定されたBトレンチでは整地土層は確認されなかった。このことから、2枚の整地土層は環状列石全体ではなく、部分的に分布する可能性が示唆される。今後、別箇所でも同様の観察を実施し、整地土層の範囲を明確にする必要がある。

・上述のように、整地土層は十和田中振テフラ(To-Cu)を主体とする層と考えられる。今後、環状列石範囲外などに深掘りトレンチを設定し、本調査地点の基本層序を、テフラ分析や鉱物分析で確立したうえで、整地土層の由来を確認することが望まれる。

(引用文献)

林 昭三.1991.日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

五十嵐俊雄.2006.考古資料の岩石学.パブリコ・サーヴェイ株式会社.194p.

伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.

伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.

伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.30-166.

伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編).2012.木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社.449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編).2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修).海青社.70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

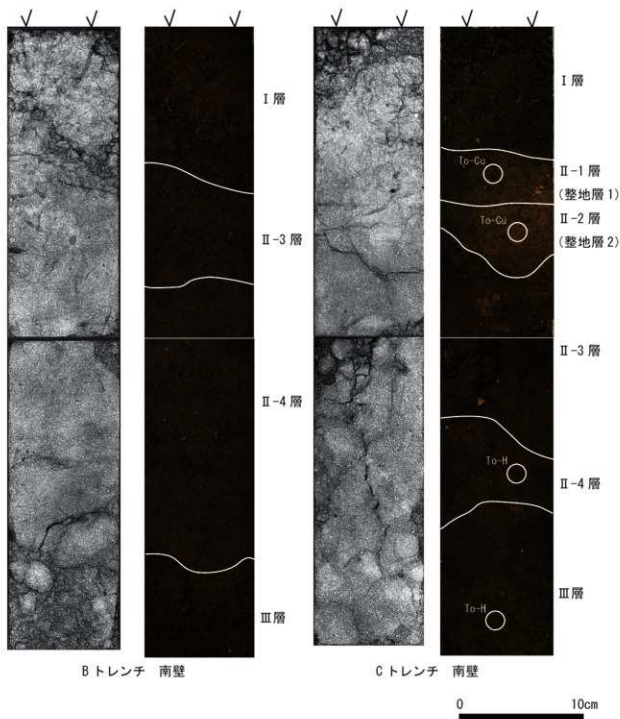
高地 謙・伊東隆夫.1982.図説木材組織.地球社.176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編).1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修).海青社.122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

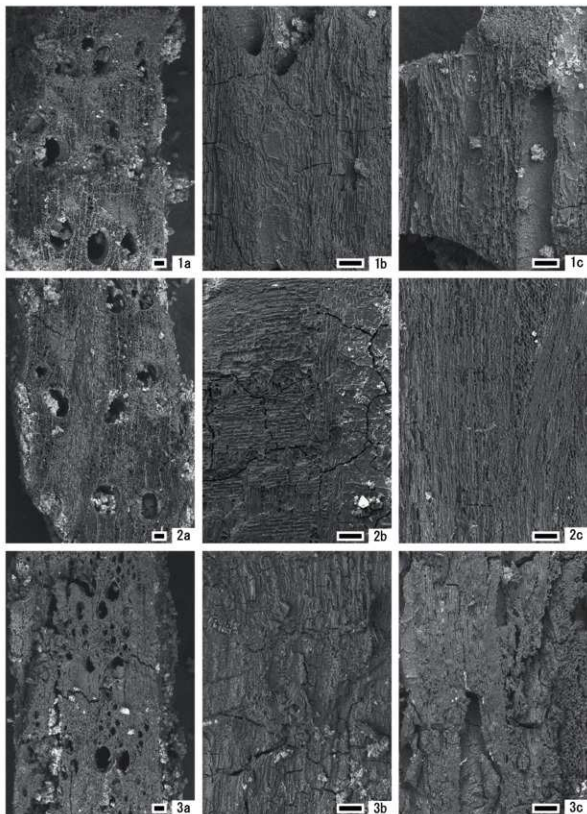
吉本文平,1959, 庭物工学, 技報堂, 710p.

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団,2017, 西平内 1 遺跡発掘調査報告書, 岩手県文化振興事業団文化財報告書第 673 集

洋野町教育委員会,2019, 西平内 1 遺跡ハンドボーリング調査報告書, 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 4 集



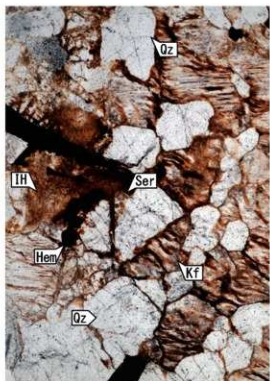
写真図版 1 柱状試料写真および軟 X 線写真



1. コナラ垂属コナラ節 (C-C17)
2. コナラ垂属コナラ節 (C-C25)
3. コナラ垂属コナラ節 (C-C27)

a:木口 b:柱目 c:板目
スケールは100 μ m

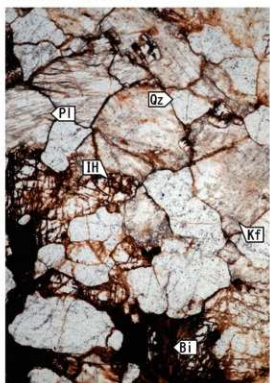
写真図版2 炭化材



1. A-S 25 下方ポーラー



2. A-S 25 直交ポーラー



3. A-S 27 下方ポーラー



4. A-S 27 直交ポーラー

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Bi:黒雲母, Hem:赤鉄鉱,
Ser:セリサイト, IH:水酸化鉄.

0.5mm
× 40

写真図版3 薄片

2. 西平内 I 遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

西平内 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市第 37 地割地内に所在する。測定対象試料は、縄文時代の環状列石に関わると見られる炭化物 5 点である (第 5 表)。

(2) 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- ②酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 5 表に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{12}C 濃度 ($^{12}\text{C}/^{13}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (第 5 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 5 表に、補正していない値を参考値として第 6 表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- ③ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 5 表に、補正していない値を参考値として第 6 表に示した。
- ④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない

^{14}C 年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCalv4.3 校正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第6表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて校正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を第5・第6表に示す。

試料5点の ^{14}C 年代は、 $1580 \pm 30\text{yrBP}$ (C-C33) から $1440 \pm 30\text{yrBP}$ (C-C25, C-C28) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いC-C33が $427 \sim 535\text{cal AD}$ の間に3つの範囲、最も新しいC-C25が $606 \sim 645\text{cal AD}$ の範囲で示される。いずれも古墳時代に相当する年代値で、推定より明らかに新しい結果となっている。上位から新しい炭化物が混入した可能性などを検討する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

<文献>

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190542	C-C25	Cトレンチ内炭化材集中部	炭化物	AAA	-26.81 ± 0.21	1,440 ± 30	83.63 ± 0.28
IAAA-190543	C-C27	Cトレンチ内炭化材集中部	炭化物	AAA	-27.48 ± 0.17	1,550 ± 30	82.48 ± 0.27
IAAA-190544	C-C28	Cトレンチ内炭化材集中部	炭化物	AAA	-26.72 ± 0.23	1,440 ± 30	83.60 ± 0.27
IAAA-190545	C-C32	Cトレンチ内炭化材集中部	炭化物	AAA	-27.41 ± 0.23	1,570 ± 30	82.20 ± 0.27
IAAA-190546	C-C33	Cトレンチ内炭化材集中部	炭化物	AAA	-28.42 ± 0.18	1,580 ± 30	82.15 ± 0.27

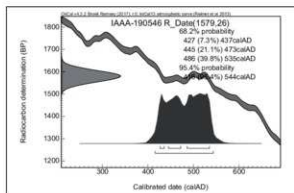
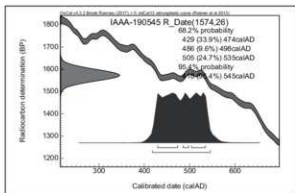
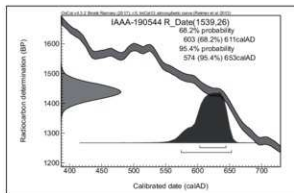
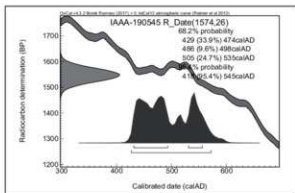
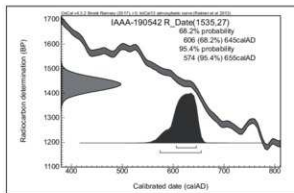
[IAA 登録番号：#9716]

第5表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

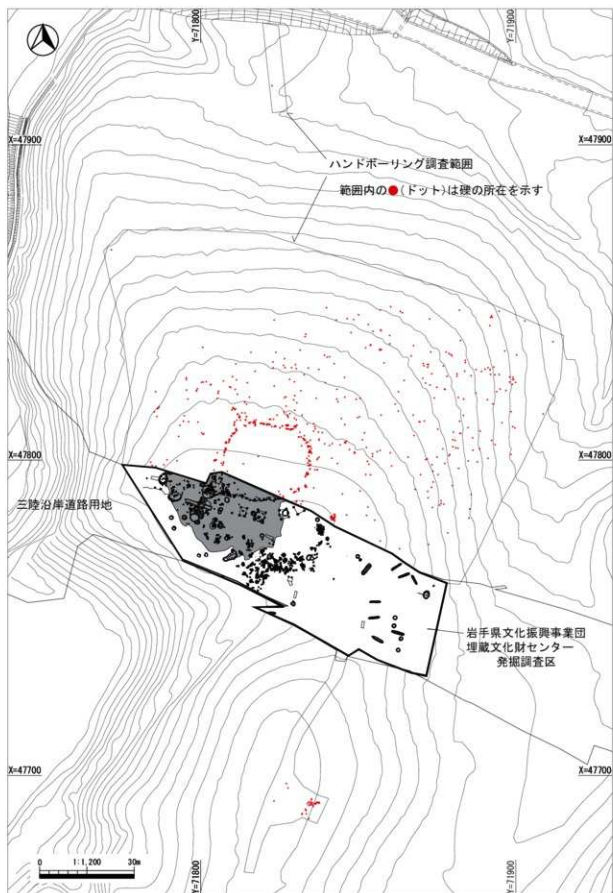
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190542	1,470 ± 30	83.32 ± 0.28	1,435 ± 27	606calAD - 645calAD (68.2%)	574calAD - 655calAD (95.4%)
IAAA-190543	1,590 ± 30	82.06 ± 0.26	1,547 ± 26	431calAD - 492calAD (49.0%) 530calAD - 555calAD (19.2%)	426calAD - 571calAD (95.4%)
IAAA-190544	1,470 ± 30	83.30 ± 0.27	1,439 ± 26	603calAD - 644calAD (68.2%)	574calAD - 653calAD (95.4%)
IAAA-190545	1,610 ± 30	81.80 ± 0.26	1,574 ± 26	429calAD - 474calAD (33.9%) 486calAD - 498calAD (9.6%) 505calAD - 535calAD (24.7%)	418calAD - 545calAD (95.4%)
IAAA-190546	1,640 ± 30	81.58 ± 0.26	1,579 ± 26	427calAD - 437calAD (7.3%) 445calAD - 473calAD (21.1%) 486calAD - 535calAD (39.8%)	416calAD - 544calAD (95.4%)

[参考値]

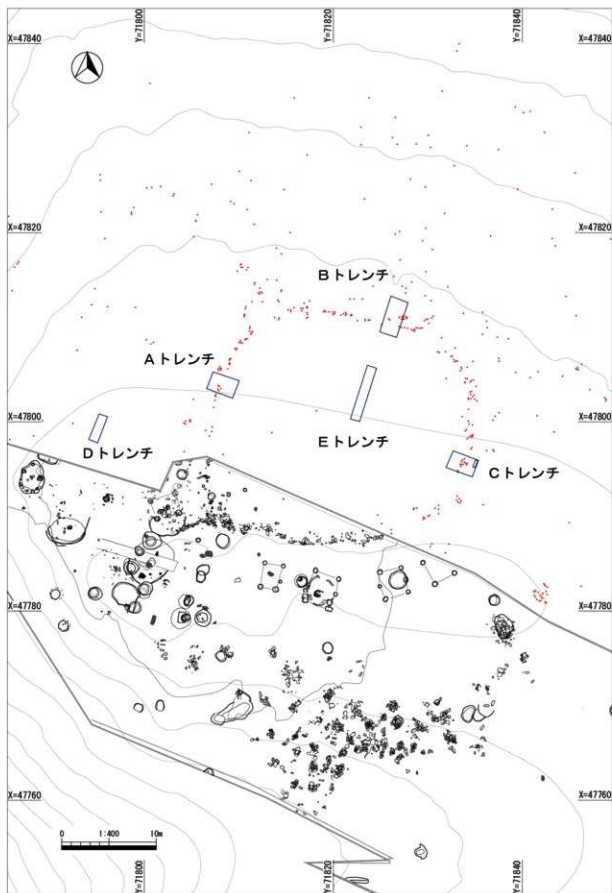
第6表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)



第6図 暦年較正年代グラフ (参考)



第7図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査遺構配置図とハンドボーリング調査成果図の合成



第8図 トレンチ配置図

IV. トレンチ発掘調査の概要と成果

1. 調査の概要

公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下岩手県埋蔵文化財センターに略称する）の発掘調査で検出された弧状の石列が、調査区外の民有地へ延びることが予想された。平成28年度に洋野町教育委員会によるハンドボーリング調査を実施した結果、弧状の石列の続きが円形に並んでいることが明らかになり、環状列石である想定された。今回の調査においては、その範囲内3箇所にトレンチ（A～C）を設定し、礫の設置状況を確認する発掘調査を実施した。また、岩手県埋蔵文化財センターの発掘調査において検出された2枚の整地層の広がりを確認するため、2箇所のトレンチ（D・E）を設定して調査を実施した。

当初は、ハンドボーリング調査により把握した石列の長軸と短軸の交点を中心として、国家座標に沿った北、西、東の位置にA～Cのトレンチを設定する予定であったが、立木等の状況から、円滑に調査が行える位置に全体を北北東へ18°ずらして設定した。D・Eのトレンチは、A～Cトレンチの調査による整地層の範囲状況をみながら位置を設定した。

トレンチ調査は令和元年9月2日～同年9月13日の日程で行った。移植ベラ等を使用し、手作業により調査を進めた。遺構保護の観点から、A～Cトレンチの掘削は礫が設置面から浮くことを防ぐため、大型の礫の下部付近でとどめた。調査において得られるデータの取得や図面作成については、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん）」を用いた。出土した遺物については、記録写真を撮影後、トータルステーションにより座標点を測量し、取り上げを行った。

第9図は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集「西平内I遺跡発掘調査報告書」（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団2017）に掲載された土層概念図を模写したものであるが、各トレンチともこの層位に基づき調査を進めた。いずれのトレンチも土層概念図に比定されることを把握したが、表土以下の色調は、土層の注記を行った時点での土の乾燥状態等の影響により土層概念図と異なったため、トレンチ毎に層順の番号を付してセクション図を掲載した。

I層 現表土（森林腐食土）
整地層1 （内帯の石列と斜面部の配置遺構の一部を被覆している黄褐色土）
整地層2 （内帯の石列を被覆している黒色土）
II層 黒色土層（斜面部西側の配石遺構構築面か）
III層 暗褐色の漸移層（斜面部東側の配石遺構構築面）
IV層 暗褐色の基盤層（八戸火山灰層）

2. 各トレンチの調査結果

(1) Aトレンチ（第10図、写真図版7）

環状列石上と想定される西北西の位置に3m×2mのトレンチを設定して掘削を行った。深さは26cm～40cmである。トレンチ内からは環状列石を構成するとみられる礫が3点検出された。

第9図 土層概念図

（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集「西平内I遺跡発掘調査報告書」3頁第305を模写）

その内2点は長辺40cm以上の大型の角礫で、石材は3点とも花崗岩である。いずれも被熱の痕跡と推測される褐色部分のみられる。

礫の下部までの堆積土は2層に分層され、第1層は黒褐色の表土、第2層は黒褐色土である。本トレンチでは整地層1及び整地層2は確認されなかった。

トレンチ内からは縄文土器が出土した(第11図、写真図版12)。A-P1は沈線が施文されている。また、写真図版のみの掲載であるが、被熱の痕跡と考えられる褐色部がある礫小片が36点出土している(写真図版12)。その内2点について、被熱温度などを推定する岩石薄片作製鑑定を実施した。

(2) Bトレンチ(第12図、写真図版8・9)

環状列石上と想定される北北東の位置に4m×2mのトレンチを設定して掘削を行った。深さは46cm～50cmである。トレンチ内から礫が4点検出された。東壁際の2点は環状列石を構成するとみられる花崗岩の大型の角礫である。その内1点は長辺が70cmを越し、被熱の痕跡と推測される褐色部分のみられる。他の2点は大型礫の設置面から20cm～30cm程高く、その内トレンチ中央付近の1点は閃緑岩の石皿である。

礫の下部までの堆積土は3層に分層され、第1層は黒褐色の表土、第2層は黒色土、第3層目黒褐色土である。本トレンチでは整地層1及び整地層2は確認されなかった。

トレンチ内からは縄文土器、土製品、石器が出土した(第13・14図、写真図版12・13)。B-P2・B-P3は沈線が施文され、B-P4は櫛歯状の条痕のみられる。B-P5・B-P6は熱糸文である。B-P7は円盤状土製品である。平行沈線文が施された鉢形土器の胴部片を転用している。石器は石斧が1点、敲石が2点、磨石が3点である。石斧(B-S1)は刃部が欠損した基部で、全体的に敲打調整が及ぶ。敲石は共に礫素材のハンマーで、B-S2は全体を研磨した円礫の上下両端部に、B-S3は下端部に敲打痕が認められる。磨石はB-S4が棒状の礫全体が磨かれたもので、B-S5・B-S6は扁平な円礫を磨いたものである。

(3) Cトレンチ(第15図、写真図版9)

環状列石上と想定される東南東の位置に3m×2mのトレンチを設定して掘削を行った。深さは38cm～52cmである。トレンチ内から礫が18点検出された。トレンチ中央に花崗斑岩の大型の角礫、その周辺に小形の角礫が散在している。石材は花崗岩、花崗斑岩、細粒花崗斑岩が多数を占め、デイサイト、バグマタイトも混じる。礫の配置は、ほとんどが中央の大型角礫下部の設置面付近に位置する。トレンチ内の北側にある礫は被熱の痕跡と推測される褐色部があるものが多い。

本トレンチでは、第1層の表土の下に整地層1、その下に整地層2が確認された。整地層1及び整地層2ともに堅く締まっている。第4層は黒色土、第5層は黒褐色土である。トレンチ東側にサブトレンチを設定して掘削し、第9図の土層概念図第IV層の暗褐色土層(本トレンチでは第6層)を確認した。環状列石を構成する礫は本トレンチの第5層の下部、第6層の上位面(第9図土層概念図の第III層・IV層)に設置していることを確認した。

また、トレンチ南東隅の礫周りで多量の炭化材と焼土粒の集中部が確認された。炭化材の20点について樹種同定を実施し、その内5点は放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。

トレンチ内からは縄文土器、石器が出土した(第16・17図、写真図版13・14)。C-P1～C-P6は繊維を多く含む土器で、C-P6は尖底土器の底部付近の破片である。C-P7・C-P8は折返口縁、C-P9は沈線のみられる。石器は扁平な円礫の全体を磨いた磨石(C-S1)が1点である。

(4) D トレンチ (第18図、写真図版10)

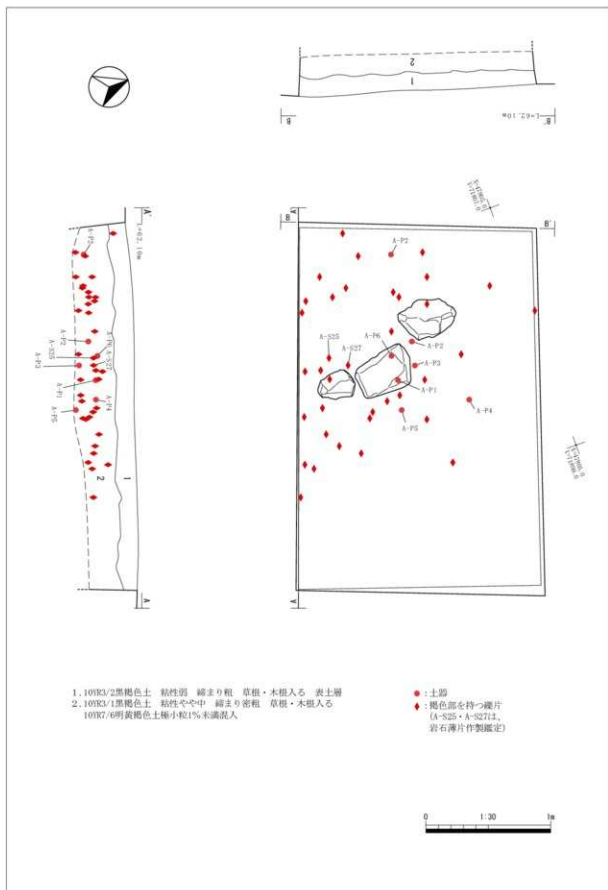
A トレンチにおいて、整地層1及び整地層2が確認されなかったことから、岩手県埋蔵文化財センターの発掘調査により検出された整地層の範囲を踏まえ、環状列石の西側にあたる場所に4m×1mのトレンチを設定した。表土(第1層)を16cm～20cm掘削したところ、黒褐色土の第2層を検出した。第18図においてスクリーンでその範囲を表したが、本トレンチ南側の約1.5m部分が極わずかに褐色気味の色調であることを確認した。C トレンチで検出した整地層1・整地層2とは色調、堅さや締まり具合が異なり、明らかな整地層ではないが、整地層1の土壌を含むものとみられる。

トレンチ内からは縄文土器が出土した(第20図、写真図版14)。D-P1・D-P2は沈線が施文されているもので、D-P2は外面に赤色塗料が付着している。

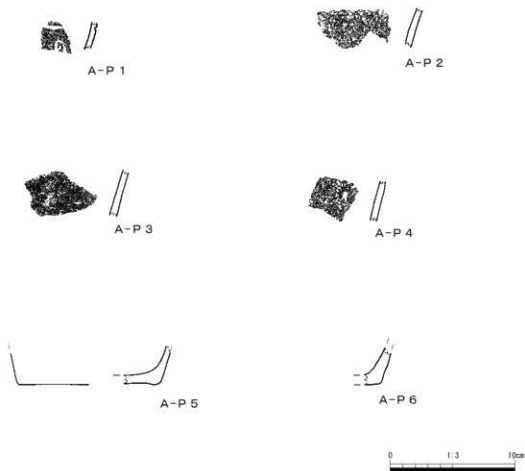
(5) E トレンチ (第19図、写真図版10)

整地層を確認できたのが、C トレンチのみであったことから、環状列石の範囲内で、整地層1及び整地層2の分布状況を確認するため、B トレンチの南側、環状列石の中央部に向かって5m×1mのトレンチを設定した。表土(第1層)を17cm～21cm掘削したところ、黒褐色土の第2層を検出した。第19図においてスクリーンでその範囲を表したが、本トレンチ南側の約1m～1.2m部分が極わずかに褐色気味の色調であることを確認した。C トレンチで検出した整地層1・整地層2とは色調、堅さや締まり具合も異なり、明らかな整地層ではないが、D トレンチと同様に整地層1の土壌を含むものと考えられる。

トレンチ内から縄文土器の底部片が出土した(第20図、写真図版14)。



第10図 Aトレンチ



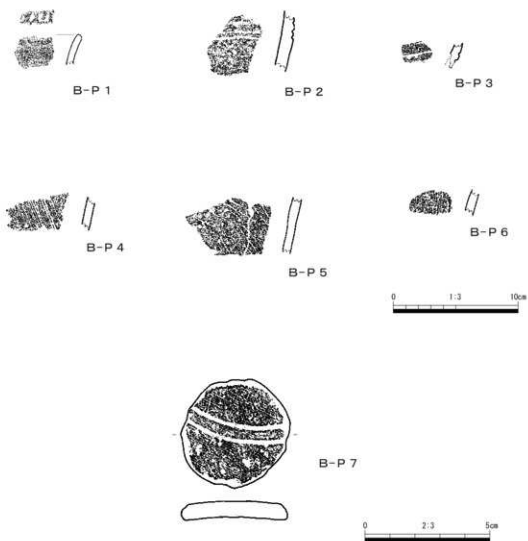
第11図 Aトレンチ出土遺物 土器

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考
A-P1	11	12	Aトレンチ 2層	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	
A-P2	11	12	Aトレンチ 2層	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	内面：炭化微粒物付着
A-P3	11	12	Aトレンチ 2層	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	内面：炭化微粒物付着
A-P4	11	12	Aトレンチ 2層	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	内面：炭化微粒物付着
A-P5	11	12	Aトレンチ 2層	底部	-	-	(294) <11.2>	ナデ	ナデ	
A-P6	11	12	Aトレンチ 2層	底部	-	-	(129) <->	ナデ	ナデ	

第7表 土器観察表(1)



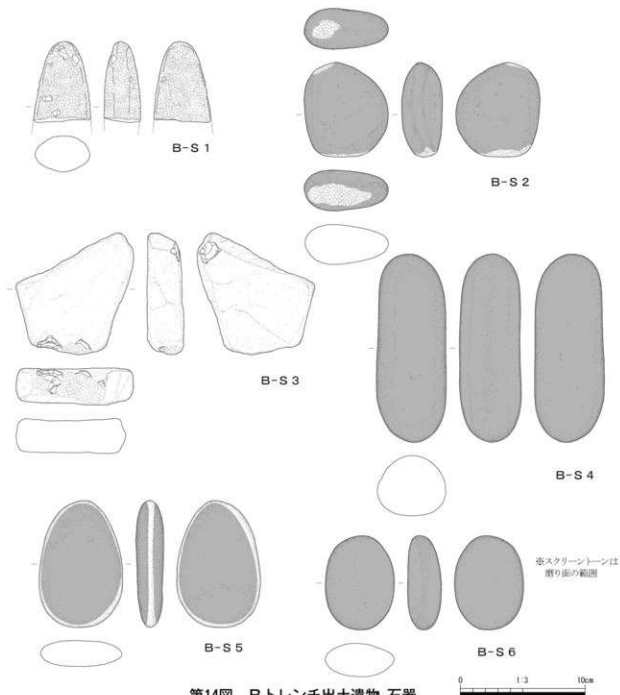
第12図 Bトレンチ



第13図 Bトレンチ出土遺物 土器・土製品

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考
B-P1	13	12	Bトレンチ 2層	口縁部	-	-	-	口縁部：唇目押玉による小波状	ナデ	外面：煤付着
B-P2	13	12	Bトレンチ 3層	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	内面：煤付着
B-P3	13	12	Bトレンチ 2層	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	
B-P4	13	12	Bトレンチ 2層	胴部	-	-	-	磨歯状条痕	ナデ	
B-P5	13	12	Bトレンチ 2層	胴部	-	-	-	磨糸文 (R)	ナデ	内外面：炭化微粒物・煤付着
B-P6	13	12	Bトレンチ 3層	胴部	-	-	-	磨糸文 (R)	ナデ	外面：炭化微粒物付着
B-P7	13	12	Bトレンチ 2層	円盤状土製品	長：4.38	短：4.05	厚：0.71	沈線	ナデ	鉢形土器胴部片転用

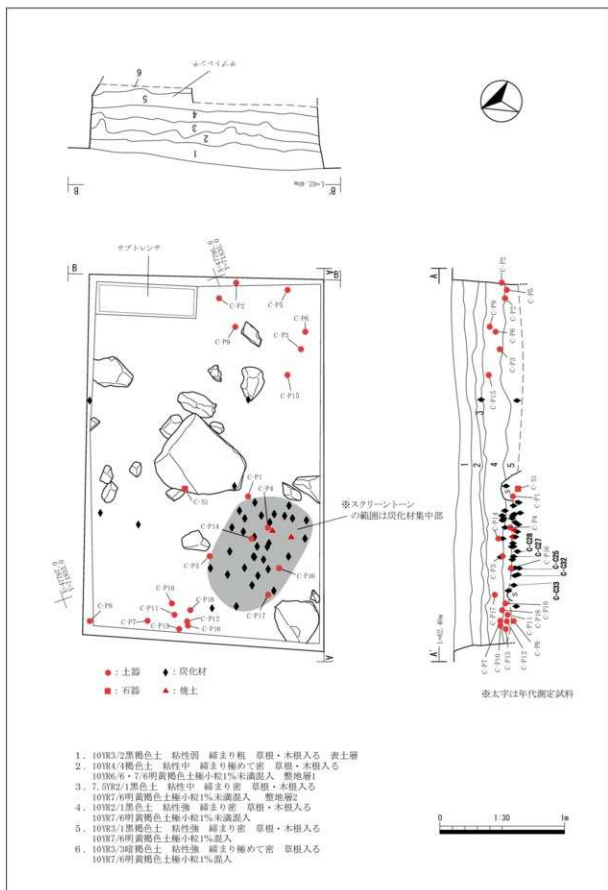
第8表 土器観察表 (2)



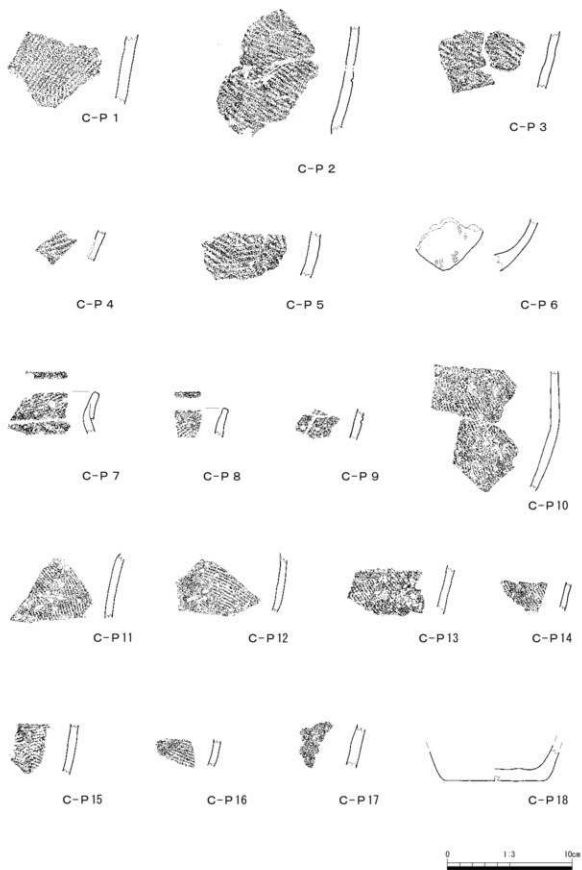
第14図 Bトレンチ出土遺物 石器

No	図版	写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
B-S1	14	13	Bトレンチ 2層	石筴	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀前期	62.90	45.20	28.90	118.60	
B-S2	14	13	Bトレンチ 1層	敲石	ハンレイ岩	ノソウケ峠	中生代白亜紀前期	74.90	66.20	32.30	289.60	
B-S3	14	13	Bトレンチ 2層	敲石	砂岩	北上山地(種市西部)	中生代	87.60	88.40	29.10	345.50	
B-S4	14	13	Bトレンチ 3層	磨石	流紋岩	北上山地 苅地山層 (八戸市-種市角沢)	中生代白亜紀前期	149.10	55.40	48.70	600.00	
B-S5	14	13	Bトレンチ 2層	磨石	デイサイト	北上山地 苅地山層 (八戸市-種市角沢)	中生代白亜紀前期	100.40	66.30	21.60	191.80	
B-S6	14	13	Bトレンチ 2層	磨石	砂岩	北上山地(種市西部)	中生代	74.70	54.70	26.70	153.10	

第9表 石器観察表(1)



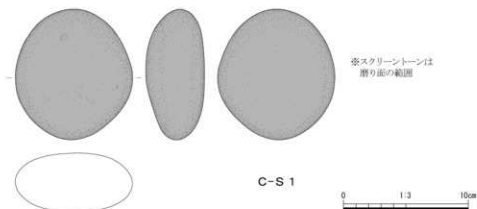
第15図 Cトレンチ



第16図 Cトレンチ出土遺物 土器

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考
C-P1	16	13	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	LR 横位	ナデ	外面：煤付着 胎土繊維多量混入
C-P2	16	13	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	内外面：煤付着 胎土繊維多量混入
C-P3	16	13	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	外面：煤付着 胎土繊維多量混入
C-P4	16	13	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	LR 横位	ナデ	胎土繊維多量混入
C-P5	16	13	Cトレンチ 5層	胴部下半	-	-	-	RL 縦位・横位	ナデ	内外面：煤付着 胎土繊維多量混入
C-P6	16	13	Cトレンチ 4層	底部	-	-	-	RL 縦位・横位	ナデ	内外面：煤付着 胎土繊維多量混入
C-P7	16	13	Cトレンチ 4層	口縁部	-	-	-	折返口縁部：RL 横位 折返部直下：RL 縦位	ナデ	C-P8と同一個体の可能性あり
C-P8	16	13	Cトレンチ 5層	口縁部	-	-	-	折返口縁部：RL 縦位	ナデ	C-P7と同一個体の可能性あり
C-P9	16	14	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	
C-P10	16	14	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	
C-P11	16	14	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	
C-P12	16	14	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	
C-P13	16	14	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	
C-P14	16	14	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	外面：煤付着
C-P15	16	14	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	RL 縦位・横位	ナデ	
C-P16	16	14	Cトレンチ 5層	胴部	-	-	-	RL 横位	ナデ	
C-P17	16	14	Cトレンチ 4層	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	外面：煤付着
C-P18	16	14	Cトレンチ 4層	底部	-	-	(3.76) <R.25>	ナデ	ナデ	

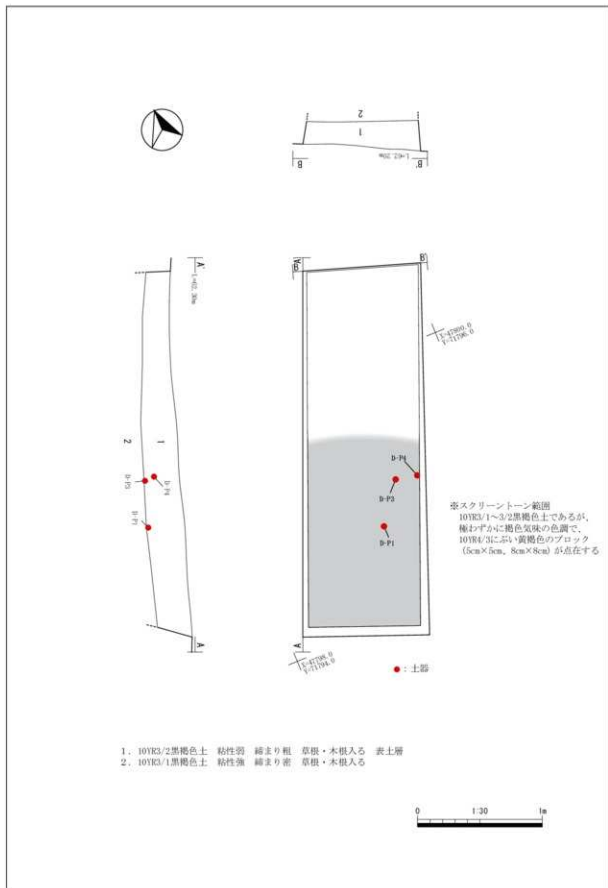
第10表 土器観察表（3）



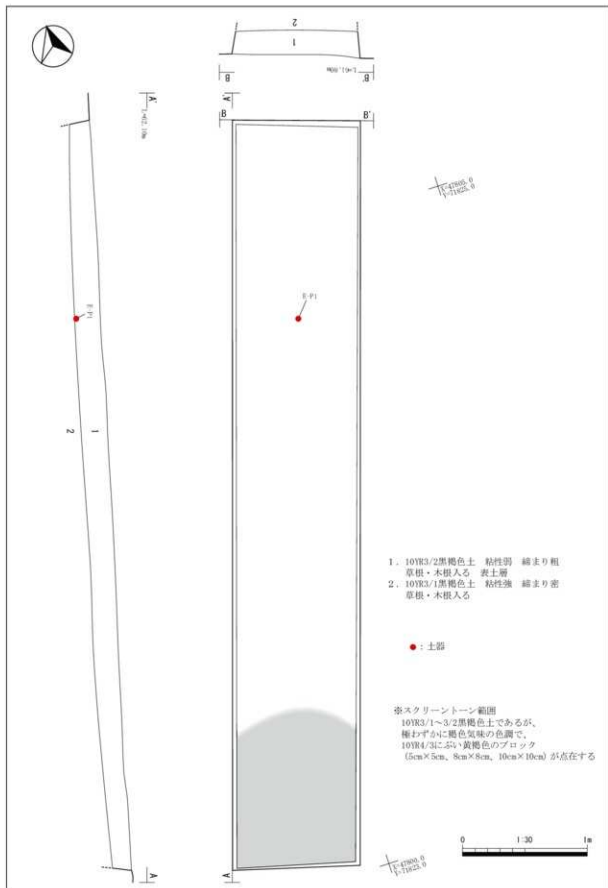
第17図 Cトレンチ出土遺物 石器

No	図版	写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
C-S1	17	14	Cトレンチ 5層	磨り石	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀前期	103.50	92.90	46.40	680.00	

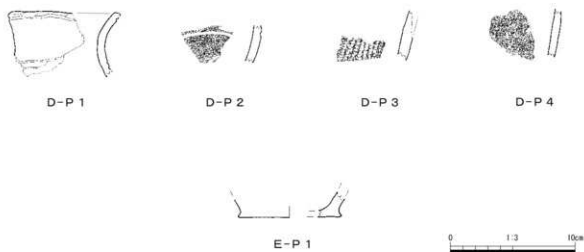
第11表 石器観察表（2）



第18図 Dトレンチ



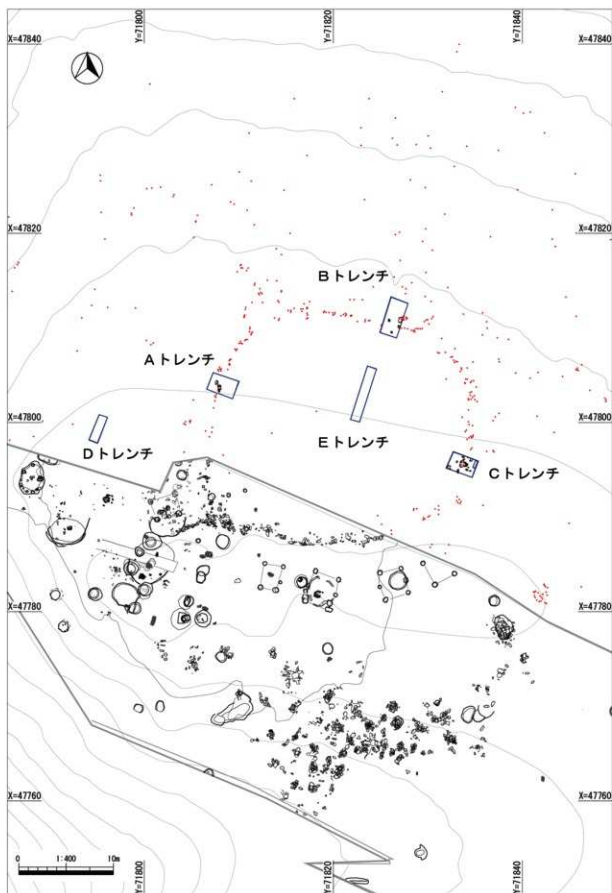
第19図 Eトレンチ



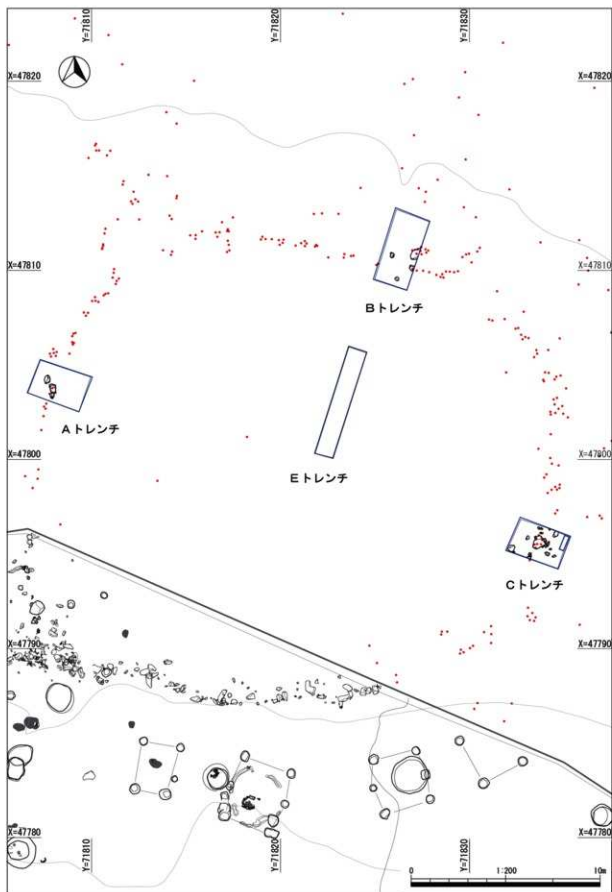
第20図 D・Eトレンチ出土遺物 土器

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考
D-P1	20	14	Dトレンチ 2層	口縁部	-	-	-	沈線	ナデ	
D-P2	20	14	Dトレンチ 排土中	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	外面：赤色塗料付着、 重量値計測なし。
D-P3	20	14	Dトレンチ 2層	胴部	-	-	-	RL縦位	ナデ	
D-P4	20	14	Dトレンチ 1層	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	
E-P1	20	14	Eトレンチ 2層	底部	-	-	(1.95) <8.20>	ナデ	ナデ	

第12表 土器観察表（4）



第21図 トレンチ内の礫平面図



第22図 第21図の拡大

3. 調査の成果とまとめ

(1) 環状列石

ハンドボーリング調査において把握した礫の所在が、環状列石であることを想定してトレンチ調査を実施した結果、それを構成する礫を検出したことから、環状列石と断定できることが明らかとなった。第23図はA～Cトレンチ内の礫について、石材別にスクリーントーンで表したもののだが、花崗岩、花崗斑岩、細粒花崗斑岩が半数以上を占める。本遺跡の西側を流れる渋谷川から礫を採取し、運び込まれたと考えられる。また、礫の特徴として褐色部があるものが多いことがあげられる。Aトレンチ内から出土した褐色部がある礫片の鑑定を実施したところ、熱を受けていたという結果が出された。この状況から類推すると、環状列石を構成する礫の褐色部分も被熱している可能性が高いものと考えられる。

なお、第24図に掲載したが、西平内I遺跡の環状列石の規模を検討するうえで、伊勢堂岱遺跡（北秋田市）、小牧野遺跡（青森市）、石倉貝塚（函館市）の環状列石などが参考になるものと考えられる。また、東北町歴史民俗資料館の古屋敷則夫氏より、小牧野遺跡（青森市）の環状列石の内帯と規模がほぼ同じであるとのことを示している。

(2) 整地層

A～Cトレンチの内、整地層1・整地層2を確認できたのは、Cトレンチのみであったことから、D・Eトレンチを設定して掘削した。両トレンチ共に表土直下から整地層1の土壌を含むとみられる色調の違いを確認したが、判然としたものではなかった。当初は整地層が環状列石全体を覆うと予想していたが、今回の調査により、環状列石全体ではなく一部を覆うものとみられ、その範囲の把握が必要である。

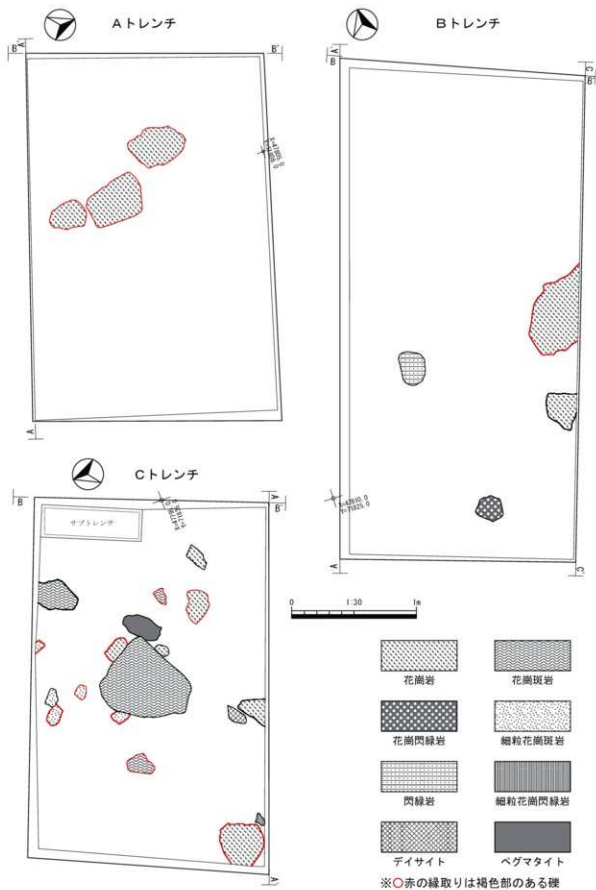
(3) 遺物

トレンチ内からの遺物量は少なく、平成26年度・27年度の発掘調査の出土事例に加わる新たな遺物の出土はなかった。縄文土器については、Cトレンチからは縄文時代前期前葉の土器が6点出土しているが、その他はほとんどが後期のものであった。また、後期前葉の土器で沈線が施文されたものが出土しており、その多くが十腰内I式古段階のものとみられる。円盤状土製品は過去の発掘調査でも多数出土しており、本遺跡の特徴の一つである。また、石器では石斧と敲石、磨石が出土したが、これらの出土数が多いのも特徴といえる。

なお、Cトレンチの炭化材集中部で採取した炭化材20点は全て同種の樹種で、その内5点の年代測定を実施した結果、全て古墳時代に相当する年代であった。2枚の整地層の下、礫の設置面付近に焼土粒とともに出土したため、当初は環状列石の当該期の年代を予想していたが、現段階では古墳時代の攪乱による混入と考えられる。未測定のものも多数あり、追加の年代測定が必要である。

(4) まとめ

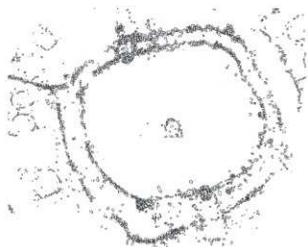
環状列石の全容は未確認で、長軸の正確な数値を出すことはできないが、ほぼ大型の部類に入る環状列石であることが明らかとなった。三陸沿岸では初めての発見であり、今後の調査で環状列石を中心とした遺跡の様相が明らかになることが期待される。



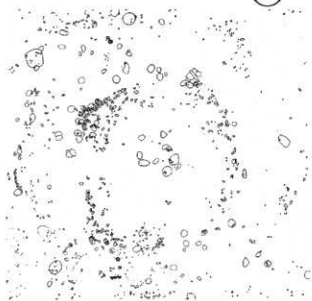
第23図 トレンチ内礫の石質



伊勢堂岱遺跡(秋田県北秋田市)



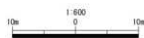
小牧野遺跡(青森県青森市)



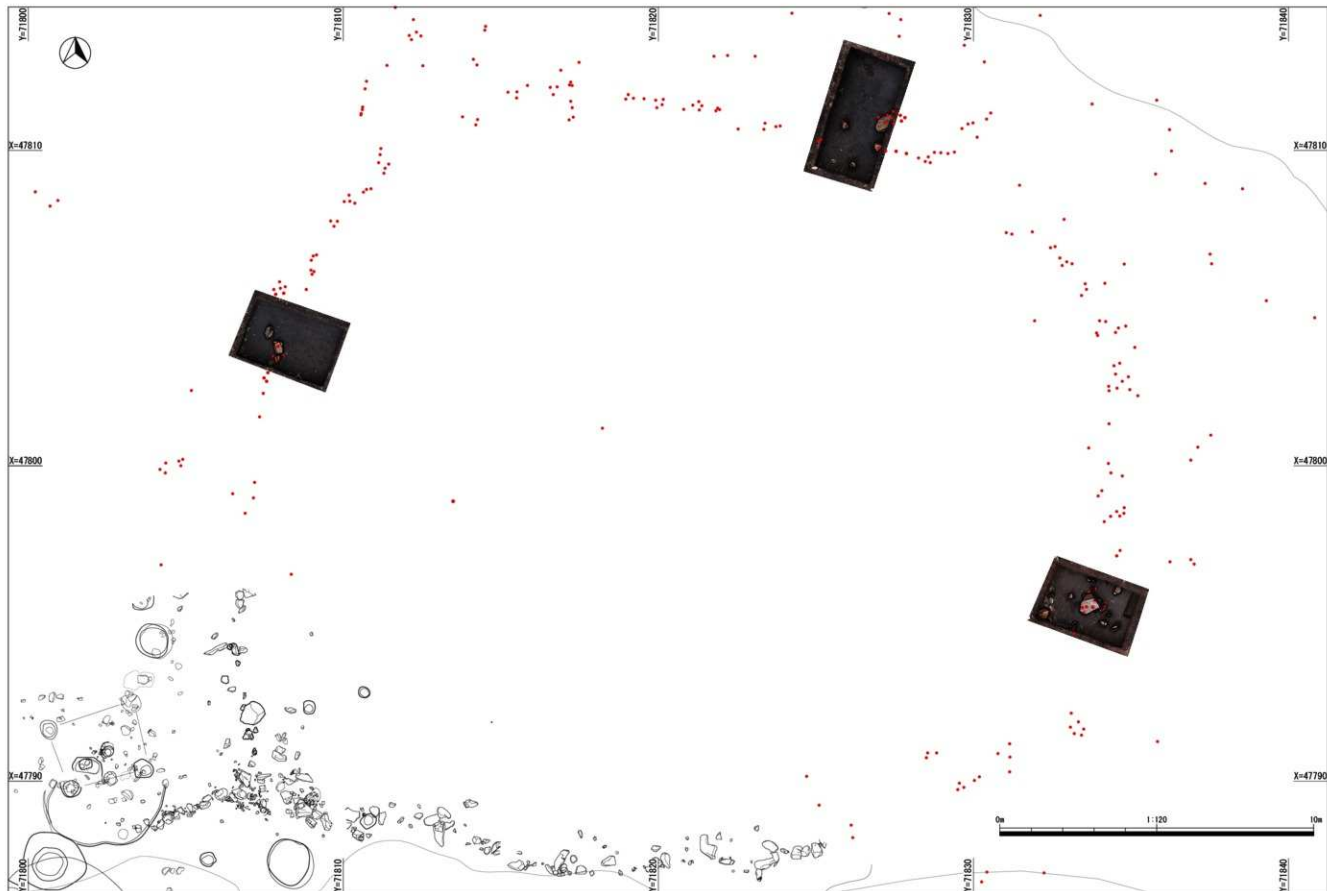
石倉貝塚(北海道函館市)



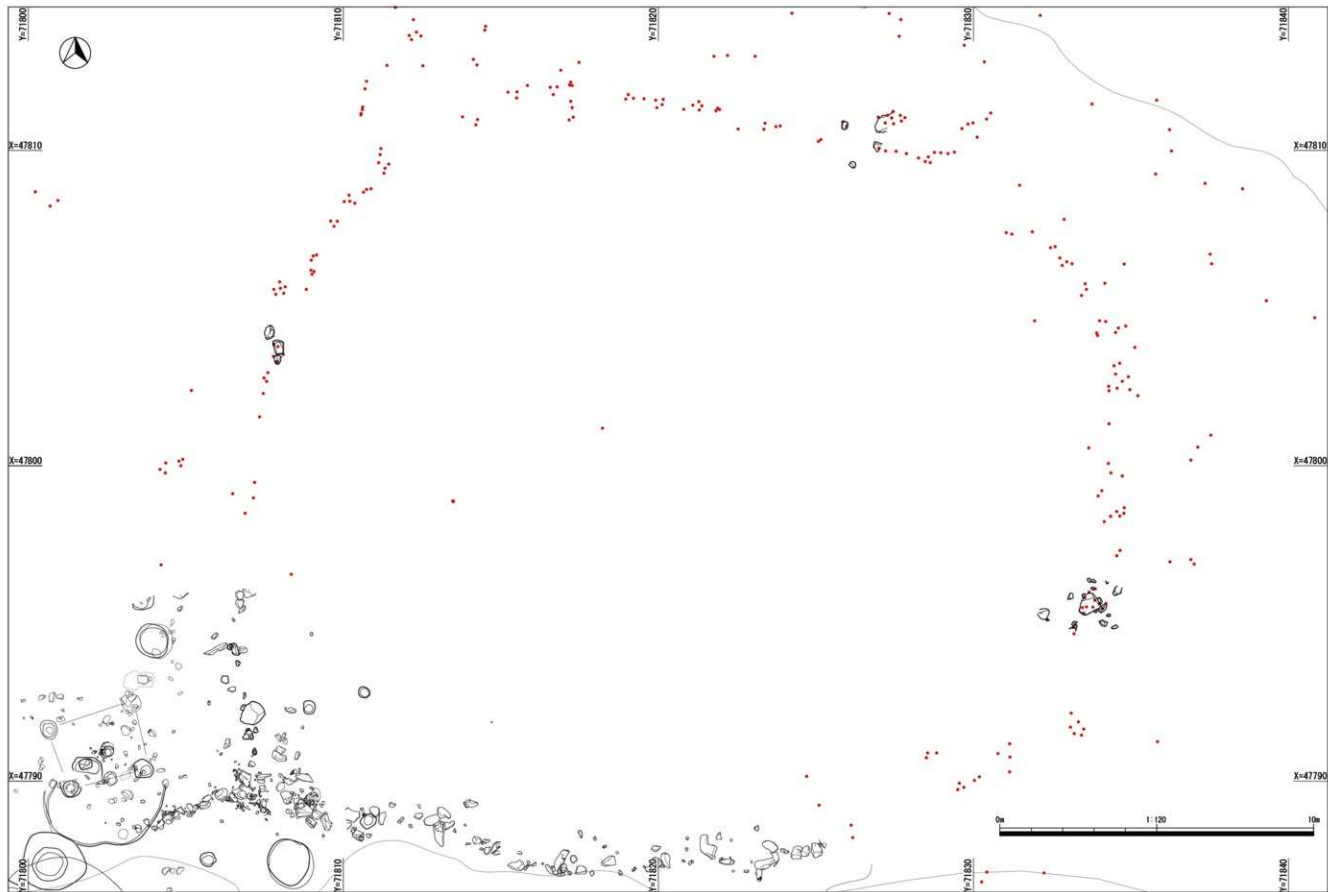
西平内I遺跡



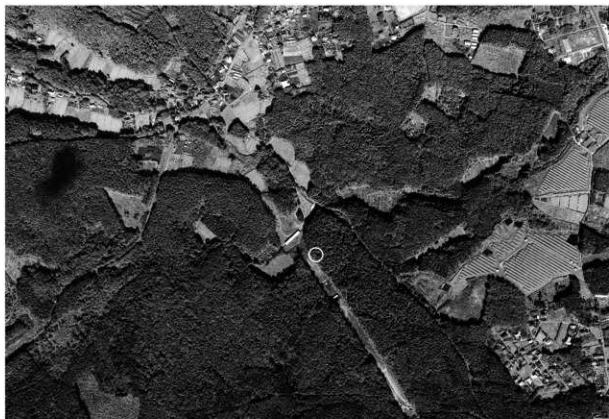
第24図 環状列石の比較



第25図 環状列石の拡大図①



第26図 環状列石の拡大図②



遺跡遠景

○(白丸)は環状列石の位置



遺跡近景

写真図版4 遺跡遠景・近景



調査前近景（西より）



調査前近景（東より）

写真図版5 調査前近景



調査後近景（西より）



調査後近景（東より）

写真図版6 調査後近景



Aトレンチ 全景



西側セクション



南側セクション



礫検出状況



礫検出状況

写真図版7 Aトレンチ



Bトレンチ 全景



北側セクション



西側セクション



東側セクション



礫検出状況

写真図版8 Bトレンチ



Cトレンチ 全景



南側セクション



東側セクション



炭化材集中部



燻検出状況

写真図版9 Cトレンチ



Dトレンチ 全景



Eトレンチ 全景



Dトレンチ 西側セクション



Eトレンチ 西側セクション



Dトレンチ 南側セクション



Eトレンチ 北側セクション

写真図版10 D・Eトレンチ



Aトレンチ 土器



Bトレンチ 土製品



Bトレンチ 石器



Bトレンチ 石器



Cトレンチ 土器



Cトレンチ 土器



Cトレンチ 炭化材集中部



作業の様子

写真図版11 遺物出土状況

Aトレンチ



A-P 1



A-P 2



A-P 3



A-P 4



A-P 5



A-P 6



褐色部のある破片



Bトレンチ



B-P 1



B-P 2



B-P 3



B-P 4



B-P 5



B-P 6



B-P 7



写真図版12 A・Bトレンチ出土遺物

Bトレンチ



B-S 1



B-S 2



B-S 3



B-S 4



B-S 5



B-S 6

Cトレンチ



C-P 1



C-P 2



C-P 3



C-P 4



C-P 5



C-P 6



C-P 7



C-P 8



写真図版13 B・Cトレンチ出土遺物

Cトレンチ



C-P9



C-P10



C-P11



C-P12



C-P13



C-P14



C-P15



C-P16



C-P17



C-P18



C-S 1

Dトレンチ



D-P1



D-P2



D-P3



D-P4

Eトレンチ



E-P1



写真図版14 C～Eトレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしひらないいちいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	西平内 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査							
巻次								
シリーズ名	洋野町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 9 集							
編著者名	千田政博							
編集機関	洋野町教育委員会							
所在地	〒 028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市 23-27 TEL 0194-65-2111							
発行年月日	2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃			
にしひらないいち 西平内 I 遺跡	いわてけんくわつ 岩手県九戸 郡洋野町種 市第37地割 ちない 地内	03507	IF48-0041	39° 31' 23"	141° 55' 44"	20190902 ～ 20190913	29㎡	環状列石の 確配置状況 確認のため のトレンチ 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西平内 I 遺跡	集落跡	縄文時代	環状列石 整地層	縄文土器 土製品 石器				

洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集

西平内 I 遺跡発掘調査報告書

環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査

印刷 令和2年3月10日

発行 令和2年3月19日

発行 洋野町教育委員会

〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市 23-27

TEL (0194) 65-2111

印刷 有限会社協同印刷

〒039-1101 青森県八戸市尻内町字尻内河原 49-1

TEL (0178) 27-4134
